

体論から Galois 理論へ

2025 年 11 月 5 日

目次

| | | |
|-----|--------------------------|----|
| 1 | K 代数 | 2 |
| 1.1 | K 代数 | 2 |
| 1.2 | 体準同型 | 3 |
| 2 | 体拡大 | 5 |
| 2.1 | 標数と素体 | 5 |
| 2.2 | 拡大次数 | 7 |
| 3 | 代数拡大 | 9 |
| 3.1 | 代数拡大 | 9 |
| 3.2 | 最小分解体 | 13 |
| 3.3 | 共軛 | 14 |
| 4 | 代数閉包 | 16 |
| 4.1 | 代数閉包の存在と一意性 | 17 |
| 5 | 分離拡大 | 23 |
| 5.1 | 分離多項式 | 23 |
| 5.2 | 分離拡大と完全体 | 25 |
| 5.3 | 分離次数 | 28 |
| 5.4 | 分離閉包 | 33 |
| 5.5 | 原始元定理 | 34 |
| 6 | Galois 拡大 | 36 |
| 6.1 | 正規拡大 | 36 |
| 6.2 | Galois 拡大 | 38 |
| 7 | Galois の基本定理 | 41 |
| 7.1 | Galois 群の作用 | 41 |
| 7.2 | Galois の基本定理 | 45 |
| 7.3 | Galois の推進定理 | 49 |

1 K 代数

1.1 K 代数

Def 1.1

k を可換環とする.

- (1) 環 A と $s_A : k \rightarrow A$ を環準同型の組 (A, s_A) を k 代数 (k -algebra)^{†1} という. このとき, s_A を (A, s_A) の構造射 (structural morphism)^{†2} という.
- (2) $(A, s_A), (B, s_B)$ を k 代数とする. 環準同型 $\varphi : A \rightarrow B$ が $\varphi \circ s_A = s_B$ を満たすとき, φ を k 準同型 (k -homomorphism) という. (A, s_A) から (B, s_B) への k 準同型の全体を $\text{Hom}_k^{\text{al}}(A, B)$ で表す.

$$\begin{array}{ccc} A & \xrightarrow{\varphi} & B \\ & \circlearrowleft & \\ s_A \swarrow & & \searrow s_B \\ & k & \end{array}$$

- (3) k 準同型が同型であれば k 同型 (k -isomorphism) という. k 代数 A の k 自己同型の全体は合成に関して群となる. これを A の k 自己同型群 (k -automorphism group) といい, $\text{Aut}_k^{\text{al}} A$ で表す.
- (4) k 準同型 $\varphi : A \rightarrow B$ が単射であれば A を $\varphi(A)$ を同一視して, $A \subset B$ と考えられる. このとき A を B の部分 k 代数 (sub- k -algebra) という.

Example 1.1. $\varphi : \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Z}/(n), m \mapsto m + (n)$ によって $\mathbb{Z}/(n)$ は \mathbb{Z} 代数と見做せる.

Prop 1.1

(A, s_A) を k 代数とする. 作用 $k \times A \rightarrow A$ を

$$a \cdot x := s_A(a)x \quad (a \in k, x \in A)$$

で定めると, A は k 加群と見做せる.

Proof. 簡単に check できる. ■

^{†1} 構造射 s_A を省略して k 代数 A とかくことが多い.

^{†2} 構造射には単射性を課す場合もある. 単射の時は $k \subset A$ と見做せる.

Prop 1.2

$(A, s_A), (B, s_B)$ を k 代数とする. $\varphi: A \rightarrow B$ を環準同型とする. このとき,

$$\varphi \text{ が } k \text{ 準同型} \Leftrightarrow k \text{ 加群の準同型 (} k \text{ 線型写像)}$$

Proof. (\Rightarrow) 準同型なので和を保つことは明らか. $a \in k, x \in A$ に対し,

$$\varphi(a \cdot x) = \varphi(s_A(a)x) = \varphi(s_A(a))\varphi(x) \stackrel{\downarrow}{=} s_B(a)\varphi(x) = a \cdot \varphi(x)$$

(\Leftarrow) $a \in k$ に対し,

$$\varphi \circ s_A(a) = \varphi(s_A(a)1) = \varphi(a \cdot 1) \stackrel{\downarrow}{=} a \cdot \varphi(1) = a \cdot 1 = s_B(a)$$

それぞれ \downarrow の位置で条件を使用した. ■

1.2 体準同型

Def 1.2

K を零環でない環とする. $K^\times = \{0\}$ のとき, K を**斜体 (skew field)** または**可除環 (division ring)** という. 特に K が可換環なら**体 (field)** という. 体の間の環準同型を**体準同型 (field homomorphism)** という.

Example 1.2. 体でない斜体の例としては **Hamilton の四元数 (Hamiltonian quaternion)** の全体 $\mathbb{H} = \mathbb{R} \oplus \mathbb{R}i \oplus \mathbb{R}j \oplus \mathbb{R}k$ が知られる.

Prop 1.3

可換環 A に対し次は同値.

- (1) A は体である.
- (2) A のイデアルは全て trivial.

Proof. (1) \Rightarrow (2) $I \subset A$ をイデアルとする. $x \in I \setminus \{0\}$ が取れるなら, $\exists y \in A, xy = 1 \in A$ より $I = A$. よって A のイデアルは $\{0\}$ または A のみ.

(2) \Rightarrow (1) $x \in A \setminus \{0\}$ に対し, $(x) = A$ である. よって $1 \in (x)$ であるから, $\exists y \in A, xy = 1$. 従って A は体. ■

Cor 1.1

体準同型は埋込, つまり単射である.

Proof. $\varphi: K_1 \rightarrow K_2$ を体準同型とする. このとき $\text{Ker } \varphi$ は K_1 のイデアルであるが, 体のイデアルは trivial である. $\varphi(1) = 1$ より, $\text{Ker } \varphi \neq A$. よって $\text{Ker } \varphi = \{0\}$ で φ は単射. ■

Def 1.3 (1) 体 L の部分環 K が体であるとき, K は L の**部分体 (subfield)**, L は K の**拡大体 (extension field)** といい, この関係を L/K で表し体拡大という.
 (2) $L/M, M/K$ が体拡大であるとき, M は L/K の**中間体 (intermediate field)** といい, $L/M/K$ で表す.

Remark 1.1. L/K が体拡大のとき L は包含写像 $K \hookrightarrow L$ を構造射として K 代数と見做せる. よって **Prop 1.1** により, L は K 線型空間と見做せる.

以降は言及せずとも, この構造射により K 代数, K 線型空間と見做すことにする.

Remark 1.2. L_1, L_2 が体 K の拡大体であるとき, K 代数と見做せる. このとき, 体準同型 $\varphi: L_1 \rightarrow L_2$ が K 準同型であるとは, $\varphi|_K = \text{id}_K$ ということであるが, **Prop 1.2** によりこれは K 線型空間 L_1, L_2 間の K 線型写像であることと同値である.

$$\begin{array}{ccc} L_1 & \xrightarrow{\varphi} & L_2 \\ & \searrow \iota_1 \quad \circlearrowright \quad \nearrow \iota_2 & \\ & K & \end{array}$$

つまり, K 準同型は体準同型かつ K 線型な写像である.

よって L_1 から L_2 の K 準同型の全体は,

$$\begin{aligned} \text{Hom}_K^{\text{al}}(L_1, L_2) &= \{\varphi \in \text{Hom}^{\text{al}}(L_1, L_2) : \varphi|_K = \text{id}_K\} \\ &= \text{Hom}^{\text{al}}(L_1, L_2) \cap \text{Hom}_K(L_1, L_2) \end{aligned}$$

L/K を体拡大とするとき, L 上の K 自己同型群は,

$$\begin{aligned} \text{Aut}_K^{\text{al}} L &= \{\varphi \in \text{Aut}^{\text{al}}(L) : \varphi|_K = \text{id}_K\} \\ &= \text{Aut}^{\text{al}}(L) \cap \text{Aut}_K(L) \end{aligned}$$

但し, $\left\{ \begin{array}{l} \text{Hom}^{\text{al}}(L_1, L_2) \text{ は } L_1 \text{ から } L_2 \text{ への体準同型全体} \\ \text{Hom}_K(L_1, L_2) \text{ は } L_1 \text{ から } L_2 \text{ への } K \text{ 線型写像全体} \\ \text{Aut}^{\text{al}}(L) \text{ は体としての } L \text{ 上自己同型群} \\ \text{Aut}_K(L) \text{ は } K \text{ 線型空間としての } L \text{ 上自己同型群} \end{array} \right. \text{ とした.}^{\dagger 3}$

Example 1.3. 複素共軛 $\rho: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}, z \mapsto \bar{z}$ は \mathbb{C} 上の \mathbb{R} 自己同型.

Example 1.4. $\varphi: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}, a + b\sqrt{-1} \mapsto a + 2b\sqrt{-1}$ ($a, b \in \mathbb{R}$) とすると,

$$\varphi \in \text{Hom}_{\mathbb{R}}(\mathbb{C}, \mathbb{C}) \text{ and } \varphi \notin \text{Hom}^{\text{al}}(\mathbb{C}, \mathbb{C})$$

なので, $\varphi \notin \text{Hom}_{\mathbb{R}}^{\text{al}}(\mathbb{C}, \mathbb{C})$

^{†3} 群としての L 上自己同型群を $\text{Aut}(L)$, 集合としての L 自己同型群 (L 上の対称群) を $\mathfrak{S}(L)$ と表すことにする.

2 体拡大

2.1 標数と素体

$\mathbb{P} \subset \mathbb{Z}$ を素数の全体とする.

Prop 2.1

K を体とする. 環準同型 $\varphi : \mathbb{Z} \rightarrow K, n \mapsto n \cdot 1^{\dagger 4}$ に対し, イデアル $\text{Ker } \varphi$ は $\text{Ker } \varphi = (p)$ ($p \in \mathbb{P} \cup \{0\}$) とかける.

Proof. $\text{Im } \varphi$ は K の部分環なので整域であり, また $\mathbb{Z} / \text{Ker } \varphi \simeq \text{Im } \varphi$ である. よって $\text{Ker } \varphi$ は素イデアルであるから, $\text{Ker } \varphi = (0)$ また $\exists p \in \mathbb{P}, \text{Ker } \varphi = (p)$. ■

$$\begin{array}{ccc}
 \mathbb{Z} & \xrightarrow{\varphi} & \text{Im } \varphi \subset K \\
 \downarrow \pi & \searrow \cong & \\
 \mathbb{Z} / \text{Ker } \varphi & &
 \end{array}$$

Def 2.1

Prop 2.1 の $p \in \mathbb{P} \cup \{0\}$ を体 K の**標数 (characteristic)** といい, $\text{ch } K$ とかく.

Example 2.1. (1) $\varphi : \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Q}$ は単射なので, $\text{ch } \mathbb{Q} = 0$.

(2) $\mathbb{F}_p := \mathbb{Z}/(p)$ ($p \in \mathbb{P}$) とすると, $\text{ch } \mathbb{F}_p = p$.

Def 2.2

真の部分体を持たない体を**素体 (prime field)** という.

Remark 2.1. 素体は \mathbb{Q} または \mathbb{F}_p しかない.

Prop 2.2

任意の体は 1 つの素体を包む. 特に標数 0 の体は \mathbb{Q} を, 正標数 p の体は \mathbb{F}_p を包む.

Proof. $\text{ch } K = 0$ のとき **Prop 2.1** から $\mathbb{Z} \subset K$ である. $\mathbb{Z} \setminus \{0\} \subset K^\times$ なので $\mathbb{Q} \subset K$ である. また $\text{ch } K = p > 0$ のとき **Prop 2.1** から $\mathbb{Z}/(p) \subset K$ であるがこれは体である. ■

$^{\dagger 4} n \cdot 1 := \underbrace{1 + \cdots + 1}_n$

Remark 2.2. 体 L_1, L_2 が共通の素体 K を包むとき, $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L_1, L_2) = \text{Hom}^{\text{al}}(L_1, L_2)$.

Prop 2.3

$\text{ch } K = p > 0, n \in \mathbb{Z}_{>0}, q = p^n$ のとき,

$$\text{Frob}_q : K \rightarrow K, x \mapsto x^q$$

は体準同型. これを **Frobenius 準同型 (Frobenius homomorphism)** という.

Proof. (1) $x, y \in K$ に対し, $\text{Frob}_q(x+y) = \text{Frob}_q(x) + \text{Frob}_q(y)$ を示す. $(x+y)^q = x^q + y^q$ を n に関する帰納法により示す. まず $n = 1$ のとき,

$$(x+y)^p = x^p + y^p + \sum_{j=1}^{n-1} \binom{p}{j} x^j y^{p-j}$$

ここで,

$$\binom{p}{j} = \frac{p!}{j!(p-j)!} = \frac{p(p-1) \cdots (p-j+1)}{j!}$$

$0 < j < p$ のとき, $j!$ は p で割れないので $p \mid \binom{p}{j}$. よって, $(x+y)^p = x^p + y^p$.
 $n(\geq 1)$ 未満での成立を仮定するとき,

$$(x+y)^q = (x+y)^{p \cdot p^{n-1}} = (x^p + y^p)^{p^{n-1}} = x^{p \cdot p^{n-1}} + y^{p \cdot p^{n-1}} = x^q + y^q$$

(2) $x, y \in K$ に対し, $\text{Frob}_q(xy) = (xy)^q = x^q y^q = \text{Frob}_q(x) \text{Frob}_q(y)$.

(3) $\text{Frob}_q(1) = 1$ は明白. ■

Cor 2.1

$f(T) \in \mathbb{F}_p[T]$ に対し, $f(T^p) = f(T)^p$.

Proof. $f(T) = a_0 + a_1 T + \cdots + a_n T^n \in \mathbb{F}_p[T]$ とする. Fermat の小定理から $\forall j, a_j^p = a_j$ なので, **Prop 2.3** を用いて,

$$f(T)^p = a_0^p + a_1^p T^p + \cdots + a_n^p T^{np} = a_0 + a_1 T^p + \cdots + a_n T^{np} = f(T^p)$$
■

Def 2.3

L/K を体拡大, $S \subset L$ を部分集合とする. K の拡大体であって S を包む最小のものを K に S を添加した体 (field obtained by adjoining S) または K 上 S で生成される体 (field generated by S) といい, $K(S)$ で表す. 特に $S = \{s_1, \dots, s_n\}$ のと

き, $K(S)$ を $K(s_1, \dots, s_n)$ で表す. 有限集合で K 上生成される体を K 上有限生成体 (finitely generated over K) という.

Remark 2.3. $K(S)$ は次で与えられる.

$$K(S) = \left\{ \frac{f(s_1, \dots, s_n)}{g(t_1, \dots, t_n)} \mid \frac{f(T_1, \dots, T_n)}{g(T_1, \dots, T_n)} \in K(T_1, \dots, T_n), s_i, t_i \in S, n \in \mathbb{N} \right\}$$

Remark 2.4. S_1, S_2 に対し $K(S_1 \cup S_2) = K(S_1)(S_2)$

Def 2.4

M_1, M_2 は体 L の部分体であるとき, $M_1 \cup M_2$ を包む最小の L の部分体を M_1, M_2 の合成体 (composite) といい, $M_1 M_2$ で表す.

Remark 2.5. $M_1 M_2 = M_1(M_2) = M_2(M_1)$ である.

2.2 拡大次数

Def 2.5

L/K を体拡大とすると, L は K 線型空間と見做せる. この空間の次元 $\dim_K L$ を拡大次数 (extension degree) といい, $[L : K]$ と表す. $[L : K] < \infty$ であるとき L/K は有限次拡大 (finite extension), $[L : K] = \infty$ であるとき無限次拡大 (infinite extension) という. $[L : K] = d$ のとき, L/K は d 次拡大 (degree d extension) という,

Example 2.2. (1) $[\mathbb{C} : \mathbb{R}] = 2$ (2) $[\mathbb{R} : \mathbb{Q}] = \aleph_1$

Prop 2.4 (有限次拡大の推移律)

$L/M/K$ を体拡大とする. このとき, $[L : K] = [L : M][M : K]$ である. 特に,

$L/M, M/K$ が有限次拡大 $\Leftrightarrow L/K$ も有限次拡大

$$\text{fin} \left(\begin{array}{c} L \\ | \\ M \\ | \\ K \end{array} \right) \text{fin}$$

Proof. $\mathcal{A} = \{\alpha_\lambda\}_\lambda \subset L$ を L の M 上の基底, $\mathcal{B} = \{\beta_\mu\}_\mu \subset M$ を M の K 上の基底とする.

このとき $\mathcal{C} := \{\alpha_\lambda \beta_\mu\}_{\lambda, \mu} \subset L$ は L の K 上の基底となっている. よって

$$[L : K] = |\mathcal{C}| = |\mathcal{A}||\mathcal{B}| = [L : M][M : K]$$

■

Def 2.6

\mathbb{Q} の有限次拡大体を**代数体 (number field)** という. $[K : \mathbb{Q}] = d$ であるとき, K は d 次体 (number field of degree d) という. 代数体は $\overline{\mathbb{Q}} \subset \mathbb{C}$ の部分体と見做せる.

3 代数拡大

3.1 代数拡大

Def 3.1

L/K を体拡大とする. 代入準同型 (evaluation homomorphism)

$$\text{ev}_\alpha: K[T] \rightarrow L, f(T) \mapsto f(\alpha)$$

の核

$$\text{Ker ev}_\alpha = \{f(T) \in K[T] \mid f(\alpha) = 0\}$$

は $K[T]$ のイデアルである. $K[T]$ は PID なので,

$$\exists p(T) \in K[T], \text{Ker ev}_\alpha = (p(T))$$

- (1) $p(T) \neq 0$ のとき, $\alpha \in L$ は K 上代数的 (algebraic over K) であるという. monic な $p(T)$ は unique であり, この $p(T)$ を α の K 上最小多項式 (minimal polynomial) という.
- (2) $p(T) = 0$ のとき, $\alpha \in L$ は K 上超越的 (transcendental over K) であるという.

L の任意の元が K 上代数的であるとき, L/K を代数拡大 (algebraic extension) という. そうでないとき, 超越拡大 (transcendental extension) という.

$$\begin{array}{ccc} K[T] & \xrightarrow{\text{ev}_\alpha} & L \\ \uparrow \iota & \searrow \text{dashed arrow} & \\ \text{Ker ev}_\alpha = (p(T)) & & 0 \end{array}$$

Remark 3.1. $\alpha \in L$ が K 上代数的 $\Leftrightarrow \exists f(T) \in K[T] \setminus \{0\}, f(\alpha) = 0$

Remark 3.2. $L/M/K$ を体拡大とする. L/K が代数拡大 $\Rightarrow L/M$ も代数拡大

$$\begin{array}{c} L \\ \uparrow \text{alg} \\ M \\ \uparrow \text{alg} \\ K \end{array}$$

Example 3.1. $\pi \in \mathbb{R}$ は \mathbb{Q} 上超越的 (\because Lindemann の定理) なので \mathbb{R}/\mathbb{Q} は超越拡大で

ある.

Example 3.2. K を体とすると, $T \in K(T)$ は K 上超越的なので $K(T)/K$ は超越拡大である.

Prop 3.1

L/K を体拡大とし, $\alpha \in L$ は K 上代数的とする. monic 多項式 $p(T) \in K[T] \setminus \{0\}$ について次は同値.

- (1) $p(T)$ が α の K 上最小多項式
- (2) $p(T)$ は $f(\alpha) = 0$ なる $f(T) \in K[T] \setminus \{0\}$ の中で次数最小のもの
- (3) $p(\alpha) = 0$ かつ K 上既約

Proof. (1) \Rightarrow (2) まず $p(T) \in \text{Ker ev}_\alpha$ より $p(\alpha) = 0$. $f(\alpha) = 0, f(T) \in K[T] \setminus \{0\}$ とすると, $f(T) \in \text{Ker ev}_\alpha = (p(T))$ より

$$\exists q(T) \in K[T], f(T) = p(T)q(T)$$

なので $\deg p(T) \leq \deg f(T)$.

(2) \Rightarrow (3) $p(\alpha) = 0$ かつ $p(T) \neq 0$ が K 上既約でないとすると

$$\exists p_1(T), p_2(T) \in K[T] \setminus \{0\}, p(\alpha) = p_1(\alpha)p_2(\alpha) = 0, \deg p_i(T) < \deg p(T)$$

となるが L は整域なので $p_1(\alpha) = 0 \vee p_2(\alpha) = 0$. これは $p(T)$ の次数最小性に矛盾.

(3) \Rightarrow (1) $(p(T)) = \text{Ker ev}_\alpha$ を示す. $p(\alpha) = 0$ から $(p(T)) \subset \text{Ker ev}_\alpha$ は明白. $K[T]$ は UFD なので $p(T)$ が K 上既約なら素元である. よって $(p(T)) \neq (0)$ は素イデアルであるが $K[T]$ は PID なのでこれは極大イデアルである. $(p(T)) \subset \text{Ker ev}_\alpha \subsetneq K[T]$ と $(p(T))$ の極大性から $\text{Ker ev}_\alpha = (p(T))$.

■

Prop 3.2

L/K を体拡大とし, $\alpha \in L$ は K 上代数的であるとする. また $p(T)$ を α の K 上最小多項式とする. このとき,

- (1) $K(\alpha) = K[\alpha]$
- (2) $K(\alpha)$ の K 上の基底として $\mathcal{B} := \{1, \alpha, \dots, \alpha^{n-1}\}$ ($n := \deg p(T)$) がとれる.
特に $[K(\alpha) : K] = \deg p(T)$

Remark 3.3. $K[\alpha] := \text{Im ev}_\alpha$ (代入準同型 $\text{ev}_\alpha : K[T] \rightarrow L$ の像)

Proof. (1) \subset は明白. $K[\alpha] \cong K[T]/\text{Ker ev}_\alpha$ は整域 L の部分環なので整域である. よって Ker ev_α は素イデアルである. また α は K 上代数的なので $\text{Ker ev}_\alpha \neq (0)$ であり, $K[T]$

は PID であるから Ker ev_α は極大イデアルである。従って, $K[\alpha] \cong K[T]/\text{Ker ev}_\alpha$ は α を含む体である。よって $K(\alpha) \subset K[\alpha]$.

$$\begin{array}{ccc}
 K[T] & \xrightarrow{\text{ev}_\alpha} & K[\alpha] \subset L \\
 \downarrow \pi & \searrow \cong & \nearrow \\
 & K[T]/\text{Ker ev}_\alpha &
 \end{array}$$

- (2) まず \mathcal{B} が $K(\alpha)$ を生成することを見る。 $p(T) = T^n + a_1T^{n-1} + \cdots + a_n$ とする。
 $m \geq n$ のとき

$$\alpha^m = -(a_1\alpha^{m-1} + \cdots + a_n\alpha^{m-n})$$

とできる。この次数下げを繰り返して, $\alpha^m \in \text{Span } \mathcal{B} \ (\forall m \in \mathbb{N})$ を得る。よって

$$K(\alpha) = K[\alpha] \subset \text{Span } \mathcal{B}$$

次に線型独立性を見る。 $c_0 + c_1\alpha + c_2\alpha^2 + \cdots + c_{n-1}\alpha^{n-1} = 0$ ($c_i \in K$) と仮定する。
 このとき

$$f(T) := c_0 + c_1T + c_2T^2 + \cdots + c_{n-1}T^{n-1}$$

と定めると $f(\alpha) = 0$ である。もし $f(T) \neq 0$ なら最小多項式 $p(T)$ の次数最小性に矛盾する。よって $f(T) = 0$, つまり $c_0 = \cdots = c_{n-1} = 0$.

■

Def 3.2

L/K を体拡大とする。 $\exists \alpha \in L, L = K(\alpha)$ のとき, L/K は**単拡大 (simple extension)** であるといい, この α を**生成元 (generator)** という。

Remark 3.4. **Prop 3.2(2)** により, 生成元 α が K 上代数的な単拡大 $K(\alpha)/K$ は有限次拡大である。

Prop 3.3

有限次拡大は代数拡大である。

Proof. L/K を有限次拡大とし, $\alpha \in L$ とする。ある $n \in \mathbb{N}$ が存在して $\{1, \alpha, \dots, \alpha^n\}$ は線型従属となる。よって非自明な線型関係式 $c_0 + c_1\alpha + c_2\alpha^2 + \cdots + c_n\alpha^n = 0$ ($c_i \in K$) がある。従って α は K 上代数的である。 ■

Remark 3.5. 逆は成り立たない。例えば $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3}, \sqrt{5}, \dots)/\mathbb{Q}$ は代数拡大だが無限次拡大である。

Prop 3.4 (代数拡大の推移律)

L/K を体拡大とする.

$$L/M, M/K \text{ が代数拡大} \Leftrightarrow L/K \text{ も代数拡大}$$

$$\begin{array}{c} L \\ \uparrow \text{alg} \\ M \\ \uparrow \text{alg} \\ K \end{array}$$

Proof. (\Rightarrow) $\alpha \in L$ とする. $p(T) = a_0 + \cdots + a_1 T + \cdots + a_{n-1} T^{n-1} + T^n \in M[T]$ を α の M 上の最小多項式とする.

$$M_0 := K, M_i := M_{i-1}(a_i) \quad (1 \leq i \leq n)$$

で体の拡大列を定める. $a_i \in M$ は K 上代数的なので当然 M_i 上代数的である. よって $\forall i, [M_i : M_{i-1}] < \infty$. 従って,

$$[M_n : K] = [M_n : M_{n-1}] \cdots [M_2 : M_1][M_1 : M_0] < \infty$$

また α は M_n 上代数的なので $[M_n(\alpha) : M_n] < \infty$. よって

$$[M_n(\alpha) : K] = [M_n(\alpha) : M_n][M_n : K] < \infty$$

従って $M_n(\alpha)/K$ は有限次拡大なので代数拡大であり, α は K 上代数的.

(\Leftarrow) $\alpha \in L$ は K 上代数的なので当然 M 上代数的でもある. よって L/M は代数拡大. また, $\alpha \in M$ は $\alpha \in L$ でもあるので K 上代数的. よって M/K は代数拡大. ■

Cor 3.1

L/K を体拡大とすると,

$$K^{\text{alg}} := \{\alpha \in K \mid \alpha \text{ is algebraic over } K\}$$

は L/K の中間体である.

Proof. $\alpha, \beta \in K^{\text{alg}}$ とすると $K(\alpha, \beta)/K$ は代数拡大であることを示せば

$$\alpha + \beta, \alpha\beta \in K^{\text{alg}}, \alpha^{-1} \in K^{\text{alg}} \quad (\alpha \neq 0)$$

が従い, $L/K^{\text{alg}}/K$ がいえる. $K(\beta)/K$ は代数拡大であるから, β は当然 $K(\alpha)$ 上代数的. $K(\alpha)/K$ と $K(\alpha)(\beta)/K(\alpha)$ が代数拡大であることから $K(\alpha, \beta)/K$ が代数拡大である. $(K(\alpha, \beta) = K(\alpha)(\beta))$ ■

3.2 最小分解体

Def 3.3

K を体, $f(T) \in K[T] \setminus K$ とする. $f(T)$ の根を全て含む K の拡大体を $f(T)$ の**分解体 (splitting field)** という. $f(T)$ の分解体の中で最小のものを $f(T)$ の**最小分解体 (smallest splitting field)** という.

Remark 3.6. $f(T) \in K[T]$ の分解体 L とは, $\alpha_1, \dots, \alpha_n \in L$ が存在して,

$$f(T) = (T - \alpha_1) \cdots (T - \alpha_n)$$

と $f(T)$ を 1 次式の積に分解できるものである.

Example 3.3. $T^4 - 5T^2 + 6 \in \mathbb{Q}[T]$ の最小分解体は $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3})$

Thm 3.1 (Kronecker の定理)

K を体, $f(T) \in K[T], \deg f(T) > 0$ とすると, $f(T)$ の分解体 L が存在する.

Proof. $n := \deg f(T)$ に関する帰納法による.

$n = 1$ のとき, $L = K$ とすればよい.

$n \geq 2$ とし, n 未満での成立を仮定する. $f(T)$ が可約であるときは n 未満の次数の多項式に分解され, 仮定からそれぞれが 1 次式の積に分解できる拡大体があるので $f(T)$ も 1 次式の積に分解できる.

$f(T)$ が既約であるとき, $K[T]$ が PID なので素イデアル $(f(T))$ は極大イデアル. よって $L := K[T]/(f(T))$ は体である. また, $\iota: K \hookrightarrow K[T]$ を包含, $\pi: K[T] \rightarrow K[T]/(f(T))$ を射影とすると, $\pi|_K = \pi \circ \iota: K \hookrightarrow L$ は単射である. これを通して L は K の拡大体と見做せる.

$$\begin{array}{ccc} K & \xrightarrow{\iota} & K[T] \\ & \searrow \pi|_K & \downarrow \pi \\ & & L = K[T]/(f(T)) \end{array}$$

$\alpha := \pi(T) \in L$ とすると, $f(\alpha) = 0$ より $f(T) = (T - \alpha)g(T)$ と分解できる. $\deg g = n - 1 < n$ より g に仮定を適用すれば $f(T)$ は 1 次式の積に分解できる. ■

3.3 共軛

Def 3.4

L/K を体拡大, $\alpha \in L$ は K 上代数的とする. α の K 上最小多項式を $p(T)$ とするとき, $p(T)$ の根^{†5}を α の K 上**共軛 (conjugate)** という.

Example 3.4. (1) $1 + \sqrt{2} \in \mathbb{C}$ の \mathbb{Q} 上共軛は $1 \pm \sqrt{2}$.

(2) $\sqrt[3]{2} \in \mathbb{C}$ の \mathbb{Q} 上共軛は $\sqrt[3]{2}, \sqrt[3]{2}\omega, \sqrt[3]{2}\omega^2$.

(3) $z \in \mathbb{C}$ の \mathbb{R} 上共軛は z と複素共軛 $\bar{z} = \Re(z) - \Im(z)\sqrt{-1}$.

Prop 3.5

$L/K, F/K$ を代数拡大, $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, F), \alpha \in L, f(T) \in K[T], f(\alpha) = 0$ とする. このとき $f(\varphi(\alpha)) = 0$. 特に $\varphi(\alpha)$ は α の K 上共軛.

Proof. $\varphi|_K = \text{id}_K$ に注意すると, $0 = \varphi(0) = \varphi(f(\alpha)) = \text{†6} \varphi(f)(\varphi(\alpha)) = f(\varphi(\alpha))$ ■

Prop 3.6

L/K を代数拡大, $\alpha, \beta \in L$ は K 上の共軛とする. このとき, K 同型 $\sigma : K(\alpha) \cong K(\beta)$ で $\sigma(\alpha) = \beta$ なるものが存在する.

Proof. $p(T)$ を α の K 上最小多項式とすると, $K(\alpha) \cong K[T]/(p(T))$ である. ここで

$$\text{ev}_\beta : K[T] \rightarrow K[\beta], f(T) \mapsto f(\beta)$$

を考えると, $p(\beta) = 0$ より $p(T) \in \text{Ker ev}_\beta$ である. よって環の準同型定理により, 全射 K 準同型 $\varphi : K[T]/(p(T)) \rightarrow K[\beta]$ で, $\varphi(T + (p(T))) = \beta$ なるものが存在する.

$$\begin{array}{ccc} K[T] & \xrightarrow{\text{ev}_\beta} & K[\beta] \\ \pi \downarrow & \circlearrowright & \nearrow \varphi \\ & K[T]/(p(T)) & \end{array}$$

^{†5} $p(T)$ の分解体を考えれば全ての根が取れる.

^{†6} $f(T) = a_0 + a_1T + \cdots + a_nT^n \in K_1[T], \varphi \in \text{Hom}^{\text{al}}(K_1, K_2)$ に対し,

$$\varphi(f)(T) := \varphi(a_0) + \varphi(a_1)T + \cdots + \varphi(a_n)T^n \in K_2[T]$$

$K[T]/(p(T))$ は体なので φ は単射であるから,

$$K(\alpha) \cong K[T]/(p(T)) \cong K[\beta] = K(\beta)$$

■

Prop 3.7

L/K を代数拡大とする.

$\alpha, \beta \in L$ は K 上共軛 $\Leftrightarrow \alpha, \beta \in L$ の K 上最小多項式は等しい.

Proof. (\Rightarrow) $p(T)$ を α の K 上最小多項式とすると, $p(\beta) = 0$ である. **Prop 3.1**(1) \Rightarrow (3) から $p(T)$ は K 上既約なので, 再び **Prop 3.1**(3) \Rightarrow (1) からは β の K 上最小多項式でもある. (\Leftarrow) 定義より明白. ■

Example 3.5. $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}) \cong \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega)$

4 代数閉包

Def 4.1

K を体とする. 任意の $f(T) \in K[T] \setminus K$ に対し, その任意の根が K に属するとき, K を**代数閉体 (algebraically closed field)** という.

Remark 4.1. K 代数閉体の代数拡大は自身のみである.

Example 4.1. \mathbb{C} は代数閉体である. (代数学の基本定理 (the fundamental theorem of algebra))

Def 4.2

Ω/K が代数拡大, Ω が代数閉体であるとき, Ω を K の**代数閉包 (algebraically closure)** という.

Example 4.2. \mathbb{C} は \mathbb{R} の代数閉包である. しかし $[\mathbb{C} : \mathbb{Q}]$ は代数拡大ではないので \mathbb{Q} の代数閉包ではない.

Prop 4.1

L/K を体拡大, L は代数閉体とすると,

$$K^{\text{alg}} := \{\alpha \in L \mid \alpha \text{ is algebraic over } K\}$$

は K の代数閉包である.

Proof. 体であることは示した. また K^{alg}/K が代数拡大であることは定義から明白. 代数閉体であることを示そう. $f(T) \in K^{\text{alg}}[T] \setminus K^{\text{alg}}$ とすると L が代数閉体であることから

$$\exists a \in K^{\text{alg}}, \exists \alpha_i \in L, f(T) = a(T - \alpha_1) \cdots (T - \alpha_n)$$

α_i は $f(T) \in K^{\text{alg}}[T]$ の根であるから, α_i は K^{alg} 上代数的. $K^{\text{alg}}(\alpha_i)/K^{\text{alg}}, K^{\text{alg}}/K$ が代数拡大なので **Prop 3.4** により $K^{\text{alg}}(\alpha_i)/K$ も代数拡大. よって α_i は K 上代数的であるから $\alpha_i \in K^{\text{alg}}$. 従って K^{alg} は代数閉体である. ■

$$\begin{array}{c}
 L \\
 \downarrow \\
 K^{\text{alg}}(\alpha_i) \\
 \uparrow \quad \downarrow \quad \uparrow \\
 \text{alg} \quad \left(\begin{array}{c} K^{\text{alg}} \\ \downarrow \\ K \end{array} \right) \quad \text{alg}
 \end{array}$$

4.1 代数閉包の存在と一意性

Thm 4.1 (Steinitz の定理)

任意の体 K に対し, K の代数閉包 Ω が unique に存在する.^{†7}

以降, この定理を前半 (存在性) と後半 (一意性) に分けて示す.

Thm 4.2

任意の体 K に対し, K の拡大体であって代数閉なものが存在する

Remark 4.2. これが示されれば **Prop 4.1** より, 任意の体 K の代数閉包が存在することがいえる.

Proof.

$$\mathcal{P} := \{f(T) \in K[T] \mid f(T) \text{ is irreducible}\}^{\dagger 8}$$

とする. 各 $f(T) \in \mathcal{P}$ ごとに変数 T_f を考える. 多変数多項式環 $A := K[\{T_f\}_{f \in \mathcal{P}}]$ のイデアル $I := (\{f(T_f)\}_{f \in \mathcal{P}})$ を考えると, $I \subsetneq A$ である.

(\because) $I = A$ と仮定する. このとき $1 \in I$ より,

$$\exists \{a_j\}_{j=1}^n \subset A, \exists \{f_j(T)\}_{j=1}^n \subset \mathcal{P}, 1 = \sum_{j=1}^n a_j f_j(T_{f_j}) \quad (*)$$

$\{f_j(T)\}_{j=1}^n \subset K[T]$ の最小分解体 F を取ると,

$$\exists \{\alpha_j\}_{j=1}^n \subset F, \forall j, f_j(\alpha_j) = 0$$

(*) において, $f_j(\alpha_j) = 0$ を代入すると,

$$1 = \sum_{j=1}^n a_j f_j(\alpha_j) = 0$$

A は零環でないのでこれは矛盾. よって $I \subsetneq A$.

$I \subsetneq A$ より $I \subseteq \mathfrak{m} \subsetneq A$ なる極大イデアル \mathfrak{m} が存在する. $L_1 := A/\mathfrak{m}$ とおくとこれは体である. また, $\iota: K \hookrightarrow K[\{T_f\}_{f \in \mathcal{P}}] = A$ を包含, $\pi: A \rightarrow A/\mathfrak{m} = L_1$ を射影とすると, $\pi|_K = \pi \circ \iota: K \hookrightarrow L_1$ は単射である. これを通して L_1 は K の拡大体と見做せる.

^{†7} この定理は ZF 上では証明できず, 選択公理を避けられないことが知られている.

$$\begin{array}{ccc}
 K & \xrightarrow{\iota} & A = K[\{T_f\}_{f \in \mathcal{P}}] \\
 & \searrow \pi|_K & \downarrow \pi \\
 & & L_1 = A/\mathfrak{m}
 \end{array}$$

$f(T) \in \mathcal{P}$ とすると, $f(T_f) \in \mathfrak{m}$ なので,

$$f(\pi(T_f)) = f(T_f + \mathfrak{m}) = f(T_f) + \mathfrak{m} = 0 \in L_1$$

なので, $f(T)$ は $\alpha := \pi|_K(T_f) \in L_1$ をもつ.

以上の議論で K を L_1 に置き換えればさらに拡大体 L_2 を得る. 同様にこれを繰り返して体の拡大列 $K \subset L_1 \subset L_2 \subset \cdots$ が構成される. そこで

$$\Omega := \bigcup_{n=1}^{\infty} L_n$$

とおくと Ω は体である.

(\because) $\alpha, \beta \in \Omega$ とすると, 充分大きい $N \in \mathbb{N}$ に対し, $\alpha, \beta \in L_N$. 当然 L_N は体なので,

$$\alpha + \beta, \alpha\beta \in L_N \subset \Omega, \alpha^{-1} \in L_N \subset \Omega \ (\alpha \neq 0)$$

Ω は代数閉であることを示そう. $f(T) = a_0 + a_1T + \cdots + a_nT^n \in \Omega[T]$ とする. 充分大きい $N \in \mathbb{N}$ に対し, $a_0, \dots, a_n \in L_N$ で $f(T) \in L_N[T]$ である. このとき,

$$\exists \alpha_1 \in L_{N+1}, \exists g_1(T) \in L_{N+1}[T], f(T) = (T - \alpha_1)g_1(T)$$

これを繰り返して,

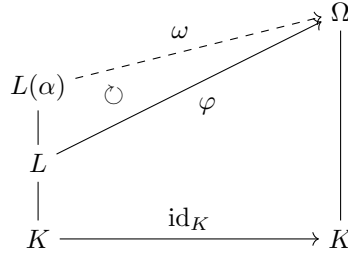
$$\exists \alpha_1, \dots, \alpha_n \in L_{N+n} \subset \Omega, f(T) = a_n(T - \alpha_1) \cdots (T - \alpha_n)$$

よって, $f(T)$ の根は全て Ω に属するから Ω は代数閉. ■

Prop 4.2

L/K は体拡大, Ω は K の代数閉包, $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \Omega)$ とする. $L(\alpha)/L$ が代数拡大なら φ の $L(\alpha)$ への延長 $\omega \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L(\alpha), \Omega)$ が存在する.

^{†8} n 次多項式 $f(T) \in K[T]$ を K^{n+1} の元と見做せば, $\mathcal{P} \subset \bigcup_{n=0}^{\infty} K^{n+1}$ と見做せる. よって \mathcal{P} は集合.



Proof. $p(T) \in L[T]$ を α の L 上最小多項式とすると, $L(\alpha) \cong L[T]/(p(T))$ である.

$$q(T) := \varphi(p)(T) \in \varphi(L)[T] \subset \Omega[T]$$

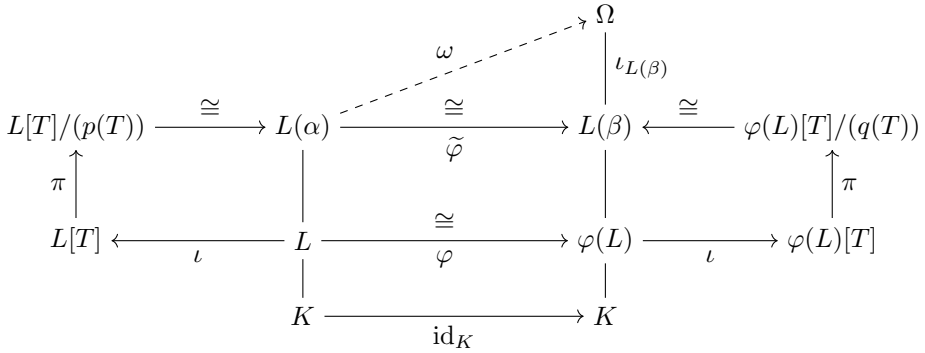
とすると, $L \cong \varphi(L)$ なので $q(T)$ は $\varphi(L)$ 上既約である. このとき,

$$L[T]/(p(T)) \xrightarrow{\cong} \varphi(L)[T]/(q(T)), f(T) + (p(T)) \mapsto \varphi(f)(T) + (q(T))$$

である. また Ω は代数閉なので $\exists \beta \in \Omega, q(\beta) = 0$ である. $q(T)$ は β の $\varphi(L)$ 上最小多項式であるから, $L(\beta) \cong \varphi(L)[T]/(q(T))$ よって,

$$\tilde{\varphi} : L(\alpha) \cong L[T]/(p(T)) \cong \varphi(L)[T]/(q(T)) \cong L(\beta)$$

$\tilde{\varphi}$ は φ の延長になっている. $\omega := \iota_{L(\beta)} \circ \tilde{\varphi}$ とすればこれが求めるべき延長である. ■



Thm 4.3

$\Omega_1/L_1/K_1, \Omega_2/L_1/K_1$ を代数拡大, Ω_1, Ω_2 を代数閉体, $\sigma : L_1 \rightarrow L_2$ は K 同型とする. このとき, σ の拡張となる K 同型 $\bar{\sigma} : \Omega_1 \rightarrow \Omega_2$ が存在する.

$$\begin{array}{ccc}
\Omega_1 & \xrightarrow[\sigma]{\cong} & \Omega_2 \\
| & \circlearrowleft & | \\
L_1 & \xrightarrow[\sigma]{\cong} & L_2 \\
| & \circlearrowleft & | \\
K & \xrightarrow{\text{id}_K} & K
\end{array}$$

Remark 4.3. この定理が示されれば体 K の代数閉包は同型を除いて unique であることがいえる。これに基づいて K の代数閉包を \bar{K} とかく。

Proof.

$$\mathcal{F} := \{(M, \varphi) \mid \Omega_1/M/L_1, \varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \Omega_2), \varphi|_{L_1} = \sigma\}$$

とおき, $(M_1, \varphi_1), (M_2, \varphi_2) \in \mathcal{F}$ に対し,

$$(M_1, \varphi_1) \preceq (M_2, \varphi_2) :\Leftrightarrow M_2/M_1, \varphi_2|_{M_1} = \varphi_1$$

と定めると, \preceq は \mathcal{F} 上の半順序である。

$$\begin{array}{ccc}
\Omega_1 & & \Omega_2 \\
| & \nearrow \varphi_2 & | \\
M_2 & \circlearrowleft & \\
| & \nearrow \varphi_1 & \\
M_1 & & \\
| & & \\
L_1 & \xrightarrow{\sigma} & L_2
\end{array}$$

$\mathcal{C} \subset \mathcal{F}$ が全順序部分集合であるとき, $\widehat{M} := \bigcup_{(M, \varphi) \in \mathcal{C}} M$ とおく. $x \in \widehat{M}$ に対し, $x \in M$ なる $(M, \varphi) \in \mathcal{C}$ を選択し, $\widehat{\varphi}(x) := \varphi(x)$ と定める. この $\widehat{\varphi}$ は well-defined である.

(\because) $x \in M_1, M_2, (M_1, \varphi_1), (M_2, \varphi_2) \in \mathcal{C}$ であったとする. \mathcal{C} は全順序部分集合なので $(M_1, \varphi_1) \preceq (M_2, \varphi_2)$ としても一般性を失わない. このとき, $\varphi_2|_{M_1} = \varphi_1$ より $\varphi_1(x) = \varphi_2(x)$.

$(\widehat{M}, \widehat{\varphi})$ は \mathcal{C} の上界である. Zorn の補題により, \mathcal{F} には極大元 $(\Omega, \bar{\sigma})$ が存在する. このとき, $\Omega = \Omega_1$ である.

(\because) $\Omega \subsetneq \Omega_1$ と仮定する. $\alpha \in \Omega_1 \setminus \Omega$ を取ると, Ω_1/K が代数拡大なので α は Ω 上代数的. よって, **Prop 4.2** より $\bar{\sigma}$ の $\Omega(\alpha)$ への延長 $\widetilde{\bar{\sigma}}$ が存在する. このとき, $(\Omega, \bar{\sigma}) \prec (\Omega(\alpha), \widetilde{\bar{\sigma}})$ であり, $(\Omega, \bar{\sigma})$ の極大性に矛盾する.

よって σ の延長となる $\bar{\sigma} \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(\Omega_1, \Omega_2)$ の存在がいえた。さらにこの $\bar{\sigma}$ は K 同型である。

(\cdot) 単射は明白なので $\bar{\sigma}(\Omega_1) = \Omega_2$ を示す。(C) は明白。 $\alpha \in \Omega_2$ とし、 α の K 上の最小多項式を $p(T) \in K[T]$ とする。 $\bar{\sigma}(\Omega_1) \cong \Omega_1$ は代数閉なので、

$$\exists \beta_1 \cdots, \beta_n \in \bar{\sigma}(\Omega_1), p(T) = (T - \beta_1) \cdots (T - \beta_n)$$

$p(\alpha) = 0$ なので

$$\exists i \in \{1, \dots, n\}, \alpha = \beta_i \in \bar{\sigma}(\Omega_1)$$

よって $\Omega_2 \subset \bar{\sigma}(\Omega_1)$.

■

Cor 4.1

L/K が代数拡大なら、 $\bar{L} = \overline{K}$

Proof. Thm 4.3 で $L_1 = K, L_2 = L$ とすればよい。

■

Def 4.3

(X, \preceq) を半順序集合とする。写像 $\text{cl}: X \rightarrow X$ が次の条件を充たすとき、 cl を閉包作用素 (closure operator) という。

- (1) $\forall x \in X, x \preceq \text{cl}(x)$ (拡大性 extensive)
- (2) $\forall x \in X, \text{cl}(x) = \text{cl}(\text{cl}(x))$ (冪等性 idempotent)
- (3) $\forall x, y \in X, x \preceq y \Rightarrow \text{cl}(x) \preceq \text{cl}(y)$ (単調性 isotone)

このとき、 $x \in X$ であって $\text{cl}(x) = x$ を充たすものを cl に関する閉元 (closed element) という。

Example 4.3. (X, \mathcal{O}) を位相空間、 \mathcal{F} をその閉集合系とする。 $\mathfrak{P}(X)$ は包含に関して半順序集合である。 $\text{cl}: \mathfrak{P}(X) \rightarrow \mathfrak{P}(X)$ を、

$$\text{cl}(A) := \bigcap_{A \subset C, C \in \mathcal{F}} C$$

と定めると、 cl は閉包作用素になる

Remark 4.4. 同型を同一視した体全体のクラスにおいて、 $K_1 \preceq K_2$ を K_2/K_1 が代数拡大であることと定めればこれは半順序である。このクラス上で代数閉包を取る操作は閉包作用素の公理を充たす。

Prop 4.3

L/K を代数拡大, $\alpha \in L$ とする.

$$\beta \in \overline{K} \text{ は } K \text{ 上共軛} \Leftrightarrow \exists \sigma \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}), \sigma(\alpha) = \beta$$

Proof. (\Rightarrow) **Prop 3.6** から K 同型 $\sigma_0 : K(\alpha) \cong K(\beta)$ で $\sigma_0(\alpha) = \beta$ なるものが存在する.

Prop 4.3 から $\overline{\sigma_0} \in \text{Aut}_K^{\text{al}}(\overline{K})$ に拡張できる. $\sigma := \overline{\sigma_0}|_L$ とすればよい.

(\Leftarrow) **Prop 3.5** と同じ主張である. ■

5 分離拡大

5.1 分離多項式

Def 5.1

K を体とする.

- (1) $\alpha \in \overline{K}$ であり, $f(T) \in \overline{K}[T]$ が $\overline{K}[T]$ 上で $(T - \alpha)^2$ で割り切れるとき, α を $f(T)$ の**重根 (multiple root)** という.
- (2) $f(T) \in K[T]$ が \overline{K} において重根をもたないとき, $f(T)$ は**分離多項式 (separable polynomial)** という.

Def 5.2

k を可換環とする. 1 変数多項式 $f(T) = a_0 + a_1T + \cdots + a_nT^n \in k[T]$ に対し,

$$\frac{df}{dT}(T) = f'(T) := a_1 + 2a_2T + \cdots + nT^{n-1} \in k[T]$$

を $f(T)$ の**微分 (derivation)** という.^{†9} また, n 変数多項式

$$f(T_1, \dots, T_n) = \sum_{i_1, \dots, i_n} a_{i_1, \dots, i_n} T_1^{i_1} \cdots T_n^{i_n} \in k[T_1, \dots, T_n]$$

に対し,

$$g(T_j) := \sum_{i_j} \left(\sum_{\substack{i_1, \dots, i_{j-1}, \\ i_{j+1}, \dots, i_n}} a_{i_1, \dots, i_n} T_1^{i_1} \cdots T_{j-1}^{i_{j-1}} T_{j+1}^{i_{j+1}} \cdots T_n^{i_n} \right) T_j^{i_j} \\ \in k[T_1, \dots, T_{j-1}, T_{j+1}, \dots, T_n][T_j]$$

を考え,

$$\frac{\partial f}{\partial T_j}(T_1, \dots, T_n) = \partial_{T_j} f(T_1, \dots, T_n) := \frac{dg}{dT_j}(T_j) \in k[T_1, \dots, T_n]$$

と定める. これを $f(T_1, \dots, T_n)$ の T_j に関する**偏微分 (partial derivation)** という.

^{†9} 線型性や Leibniz rule, chain rule が当然成り立つ.

Prop 5.1

$f(T) \in K[T], \alpha \in \overline{K}$ とする.

$$\alpha \text{ が } f(T) \text{ の重根} \Leftrightarrow f(\alpha) = f'(\alpha) = 0$$

Proof. (\Rightarrow) 仮定から $\exists g(T) \in \overline{K}[T], f(T) = (T - \alpha)^2 g(T)$ で,

$$f'(T) = 2(T - \alpha)g(T) + (T - \alpha)^2 g'(T)$$

から $f'(\alpha) = 0$

(\Leftarrow) 剰余の定理により $\exists g(T) \in \overline{K}[T], \exists p, q \in \overline{K}, f(T) = (T - \alpha)^2 g(T) + pT + q$ であるが,

$$f'(T) = 2(T - \alpha)g(T) + (T - \alpha)^2 g'(T) + p$$

仮定から $p\alpha + q = 0, p = 0$ なので $p = q = 0$ を得る. ■

Cor 5.1

$f(T) \in K[T]$ とする. 次は同値.

- (1) $f(T)$ は分離多項式.
- (2) $f(T)$ と $f'(T)$ は $K[T]$ の元として互いに素.

Proof. (1) \Rightarrow (2) もし $f(T)$ と $f'(T)$ は $K[T]$ の元として互いに素でなければ,

$$\exists g(T) \in K[T] \setminus K, g(T) | f(T), g(T) | f'(T)$$

$g(\alpha) = 0$ なる $\alpha \in \overline{K}$ に対し, $f(\alpha) = f'(\alpha) = 0$. **Prop 5.1** により α は $f(T)$ の重根. これは矛盾.

(2) \Rightarrow (1) $f(T)$ と $f'(T)$ は $K[T]$ の元として互いに素なら,

$$\exists a(T), b(T) \in K[T], a(T)f(T) + b(T)f'(T) = 1$$

もし, $\alpha \in \overline{K}$ が $f(T)$ の重根なら, **Prop 5.1** により, $f'(\alpha) = 0$ だが, $a(\alpha)f(\alpha) + b(\alpha)f'(\alpha) = 0$ となり矛盾. ■

Prop 5.2

$f(T) \in K[T]$ は K 上既約とする.

$$f(T) \text{ が分離多項式} \Leftrightarrow f'(T) \neq 0$$

$$f(T) \text{ が非分離多項式} \Leftrightarrow f'(T) = 0$$

Proof. $f(T)$ が非分離多項式 $\Leftrightarrow f'(T) = 0$ を示す.

(\Rightarrow) 仮定から $f(T)$ と $f'(T)$ は $K[T]$ は互いに素でないで,

$$\exists a(T) \in K[T] \setminus K, a(T) | f(T), a(T) | f'(T)$$

ここで $f(T)$ は K 上既約なので, $\exists k \in K, f(T) = ka(T)$. よって, $f(T)|f'(T)$. $f'(T) \neq 0$ なら, $\deg f'(T) < \deg f(T)$ となり矛盾.

(\Leftarrow) $f(T)$ の根 $\alpha \in \overline{K}$ を取ると, $f(\alpha) = f'(\alpha) = 0$ なので, **Prop 5.1** から α は重根. ■

Prop 5.3

$\text{ch } K = 0$ なる体 K に対し, 既約多項式 $f(T) \in K[T]$ は分離多項式.

Proof. $f(T) = a_0 + a_1T + \cdots + a_nT^n \in K[T]$ を既約多項式, $\deg f(T) = n$ とすると, $f'(T) = na_nT^{n-1} + \cdots \neq 0$ なので **Prop 5.2** より $f(T) \in K[T]$ は分離多項式. ■

Example 5.1. $f(T) = T^2 + 1 \in \mathbb{R}[T]$ は $f'(T) = 2T \neq 0$ より分離多項式.

Prop 5.4

K は $\text{ch } K = p > 0$ なる体とする. このとき次は同値.

- (1) $f(T)$ は非分離多項式
- (2) $\exists g(T) \in K[T] : K$ 上既約分離多項式, $\exists n > 0, f(T) = g(T^{p^n})$

Example 5.2. $f(T) = T^2 + 1 \in \mathbb{F}_2[T]$ は分離多項式ではない. ($g(T) = T + 1, n = 1$ とすれば $f(T) = g(T^2)$ である.) 実際,

$$f(T) = T^2 + 1 = T^2 - 2T + 1 = (T - 1)^2$$

なので重根 1 をもつ.

5.2 分離拡大と完全体

Def 5.3

K を体とする.

- (1) $\alpha \in \overline{K}$ に対し, α の K 上最小多項式が分離多項式であるとき, α は K 上分離的 (separable over K), そうでないとき非分離的 (inseparable) であるという.
- (2) L/K を代数拡大とする. L の任意の元が K 上分離的であるとき, L/K は分離拡大 (separable extension), そうでないとき非分離拡大 (inseparable extension) であるという.

Remark 5.1. $L/M/K$ を代数拡大とする. $\alpha \in L$ が K 上分離的なら M 上でも分離的である.

(\because) α の M 上の最小多項式 $g(T)$ は α の K 上の最小多項式 $f(T)$ を割り切る. よって $f(T)$ が重根を持たないとき, $g(T)$ も重根を持たない.

従って, L/K が分離拡大 $\Rightarrow L/M$ も分離拡大

$$\begin{array}{c} L \\ \uparrow \text{sep} \\ M \\ \uparrow \text{sep} \\ K \end{array}$$

Example 5.3. (1) $\sqrt[3]{2} \in \overline{\mathbb{Q}}$ は \mathbb{Q} 上分離的. 実際, \mathbb{Q} 上の最小多項式 $p(T) = T^3 - 2$ は $p'(T) = 3T^2 \neq 0$ から分離多項式.
 (2) $\sqrt[3]{X} \in \overline{\mathbb{F}_3(X)}$ は $\mathbb{F}_3(X)$ 上非分離的. 実際, $\mathbb{F}_3(X)$ 上の最小多項式 $p(T) = T^3 - X$ は $p'(T) = 0$ または $p(T) = (T - X)^3$ から非分離多項式.

Prop 5.5

K は $\text{ch } K = p > 0$ なる体, L/K を体拡大とする. $\alpha \in L \setminus K$ が,

$$\exists N \geq 0, \alpha^{p^{N-1}} \notin K, \alpha^{p^N} \in K$$

を満たすとき, α は K 上非分離的で, α の K 上最小多項式は $T^q - \beta$ ($q := p^N, \beta := \alpha^q$) である.

Proof. Proof(1) of **Prop 2.3** より $T^q - \beta = (T - \alpha)^q$ であるから, α の K 上最小多項式は $p(T) = (T - \alpha)^n$ ($0 < n \leq q$) とかける. $n < q$ と仮定する. このとき, $n = p^i m, \gcd(m, p) = 1$ とすると,

$$p(T) = (T - \alpha)^{p^i m} = (T^{p^i} - \alpha^{p^i})^m$$

$\alpha^{p^{N-1}} \notin K$ から $\alpha^{p^i} \notin K$ であり $p(T) = T^n - m\alpha^{p^i} T^{p^i(m-1)} + \dots$ であるが, $m\alpha^{p^i} \notin K$ なので $p(T) \in K[T]$ に矛盾する. よって $p(T) = (T - \alpha)^q = T^q - \beta$ (非分離多項式) であり, α は K 上非分離的. ■

Def 5.4

K は $\text{ch } K = p > 0$ なる体とすると,

$$K^{p^{-1}} := \{\alpha \in \overline{K} \mid \alpha^p \in K\}$$

と定める.

Remark 5.2. $K^{p^{-1}}$ は Frobenius 準同型 $\text{Frob}_p : \overline{K} \rightarrow \overline{K}$ による部分体 $K \subset \overline{K}$ の逆像なので

\overline{K} の部分体である. また, $K^{p^{-1}}/K$ は明白である. $K^{p^{-1}}$ は K の元の p 乗根全体で K 上生成される体である.

Def 5.5

任意の代数拡大が分離拡大となる体を**完全体** (perfect field) という.

Remark 5.3. **Prop 5.3** より標数 0 の体は完全体である.

Prop 5.6

K は $\text{ch } K = p > 0$ なる体とする.

$$K \text{ は完全体} \Leftrightarrow K^{p^{-1}} = K$$

Proof. (\Rightarrow) $K^{p^{-1}} \supsetneq K$ と仮定すると, $\exists \alpha \in \overline{K} \setminus K, \alpha^p := \beta \in K$. しかし **Prop 5.5** より $T^p - \beta = (T - \alpha)^p$ は K 上既約. これは非分離多項式なので K が完全体であることに矛盾する. よって $K^{p^{-1}} = K$.

(\Leftarrow) まず仮定より,

$$\forall a \in K, \forall n > 0, \exists b \in K, a = b^{p^n}$$

(\because) $a \in K$ とすると $a \in K^{p^{-1}}$ から $\exists c_1 \in K, a = c_1^p$. また $c_1 \in K^{p^{-1}}$ より $\exists c_2 \in K, c_1 = c_2^p$. よって $a = c_2^{p^2}$. これを繰り返して $b := c_n$ とすればよい.

$f(T) \in K[T]$ は既約とする. ここで $f(T)$ が非分離多項式であると仮定すると, **Prop 5.4** より,

$$\exists g(T) = a_0 + \cdots + a_{m-1}T^{m-1} + T^m \in K[T] : K \text{ 上既約分離}, \exists n > 0, f(T) = g(T^{p^n})$$

上の議論から $\forall i \in \{0, \dots, m-1\}, \exists b_i \in K, a_i = b_i^{p^n}$ であるから,

$$\begin{aligned} f(T) &= a_0 + \cdots + a_{m-1}T^{p^n(m-1)} + T^{p^nm} \\ &= b_0^{p^n} + \cdots + b_{m-1}^{p^n}T^{p^n(m-1)} + T^{p^nm} = (b_0 + \cdots + b_{m-1}T^{m-1} + T^m)^{p^n} \end{aligned}$$

となり, $f(T)$ が K 上既約であることに矛盾. よって $f(T)$ は分離多項式である. 従って \overline{K} の任意の元は K 上分離的. ■

Example 5.4. $\sqrt[p]{T} \in \mathbb{F}_p(T)^{p^{-1}} \setminus \mathbb{F}_p(T)$ より $\mathbb{F}_p(T)$ は完全体でない.

Cor 5.2

有限体は完全体である.

Proof. Frobenius 準同型 $\text{Frob}_p : K \rightarrow K, x \mapsto x^p$ は体準同型なので単射である. よって

$$|\text{Frob}_p(K)| = |K|, \text{Frob}_p(K) \subset K$$

であり $|K| < \infty$ なので $\text{Frob}_p(K) = K$. つまり Frob_p は全射. よって $K^{p^{-1}} = K$ であるから **Prop 5.6** により K は完全体. ■

Def 5.6

K は $\text{ch } K = p > 0$ なる体, L/K を体拡大とする.

$$\forall \alpha \in L, \exists n \geq 0, \alpha^{p^n} \in K$$

を充たすとき, L/K を**純非分離拡大 (purely inseparable extension)** という. また K/K も純非分離拡大であるとする.^{†10}

Prop 5.7

L/K は体拡大, $\text{ch } K = p > 0$ とする. 次は同値.

- (1) L/K は純非分離拡大
- (2) 任意の $\alpha \in L \setminus K$ は K 上分離的

Proof. (1) \Rightarrow (2) **Prop 5.5** より従う.

(2) \Rightarrow (1) $\alpha \in L \setminus K, p(T)$ を α の K 上最小多項式とする. $p(T)$ は非分離多項式なので,

$$\exists g(T) \in K[T] : K \text{ 上既約分離}, \exists n > 0, p(T) = g(T^{p^n})$$

$\alpha^{p^n} \in L$ は $g(T)$ の根なので, $\deg g(T) > 1$ と仮定すると $L \setminus K$ が K 上分離的な元を含み

(2) に矛盾. よって $\deg g(T) = 1$ で $\exists \beta \in K, g(T) = T - \beta$ とすると, $\alpha^{p^n} = \beta \in K$. ■

5.3 分離次数

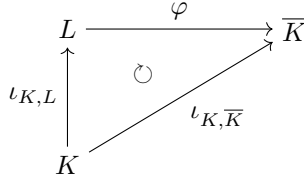
Def 5.7

L/K を有限次拡大とする. $[L : K]_{\text{sep}} := |\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})|$ を**分離次数 (separable degree)** という. また, $[L : K]_{\text{ins}} := \frac{[L : K]}{[L : K]_{\text{sep}}}$ を**非分離次数 (inseparable degree)** という.^{†11}

Remark 5.4. 分離次数 $[L : K]_{\text{sep}}$ は以下の可換図式における φ の本数.

^{†10} K/K は分離拡大なので純非分離拡大は非分離拡大とは限らない.

^{†11} 包含 $\iota : L \hookrightarrow \overline{K}$ は K 準同型なので $[L : K]_{\text{sep}} \geq 1$ であり, $[L : K]_{\text{ins}}$ は定義される.



以降この分離次数について考察しよう.

Prop 5.8

$K(\alpha)/K$ が代数拡大のとき,

$$[K(\alpha) : K]_{\text{sep}} \leq [K(\alpha) : K]$$

さらに,

$$\alpha \text{ が } K \text{ 上分離的} \Leftrightarrow [K(\alpha) : K]_{\text{sep}} = [K(\alpha) : K]$$

$$\alpha \text{ が } K \text{ 上非分離的} \Leftrightarrow [K(\alpha) : K]_{\text{sep}} < [K(\alpha) : K]$$

Proof. $p(T) \in K[T]$ を α の K 上最小多項式とし, $n := \deg p(T)$ とする.

$$p(T) = (T - \alpha_1) \cdots (T - \alpha_n) \quad (\alpha_i \in \overline{K})$$

とする. **Prop 4.3** より, 各 $i \in \{1, \dots, n\}$ に対し, $\varphi_i \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})$ を $\varphi_i(\alpha) = \alpha_i$ を充たすものとして定義できる.

一方 $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})$ に対し,

$$p(\varphi(\alpha)) = \varphi(p(\alpha)) = \varphi(0) = 0$$

より $\exists i \in \{1, \dots, n\}, \varphi = \varphi_i$ である. 従って $\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K}) = \{\varphi_1, \dots, \varphi_n\}$.

$$\therefore |\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})| \leq n = \deg p(T) = [K(\alpha) : K]$$

さらに,

$$\alpha \text{ が } K \text{ 上分離的} \Leftrightarrow p(T) \text{ は分離多項式}$$

$$\Leftrightarrow \alpha_1, \dots, \alpha_n \text{ は相異なる.}$$

$$\Leftrightarrow \varphi_1, \dots, \varphi_n \text{ は相異なる.}$$

$$\Leftrightarrow |\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})| = n = [K(\alpha) : K]$$

また, α が分離的であることと, α が非分離的であることは排反かつ全ての場合を尽くすので,

$$\alpha \text{ が } K \text{ 上非分離的} \Leftrightarrow [K(\alpha) : K]_{\text{sep}} < [K(\alpha) : K]$$

もいえる. ■

Remark 5.5. この証明から $[K(\alpha) : K]_{\text{sep}}$ は α の K 上共軛の個数であることがわかる. 分離拡大では α の最小多項式において共軛はダブリなくカウントされ $[K(\alpha) : K]_{\text{sep}} = [K(\alpha) : K]$ となる.

Prop 5.9

有限次拡大 $L/M/K$ に対し,

$$[L : K]_{\text{sep}} = [L : M]_{\text{sep}}[M : K]_{\text{sep}}, \quad [L : K]_{\text{ins}} = [L : M]_{\text{ins}}[M : K]_{\text{ins}}$$

Proof. **Thm 4.3** から, $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \overline{K})$ に対し, 拡張となる K 同型

$$\overline{\varphi} : \overline{M} \xrightarrow{\cong} \overline{K}$$

が存在する. ここで M/K は代数拡大であるから $\overline{M} = \overline{K}$ なので, $\overline{\varphi} \in \text{Aut}_K^{\text{al}} \overline{K}$ である. 各 $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \overline{K})$ に対し $\overline{\varphi}$ を 1 つ選択しておき, 写像 Φ を次で定める.

$$\begin{aligned} \Phi : \text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \overline{K}) \times \text{Hom}_M^{\text{al}}(L, \overline{K}) &\rightarrow \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) \\ (\varphi, \psi) &\mapsto \overline{\varphi} \circ \psi \end{aligned}$$

このとき, Φ は全単射となる. 実際,

$$\begin{aligned} \Psi : \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) &\rightarrow \text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \overline{K}) \times \text{Hom}_M^{\text{al}}(L, \overline{K}) \\ \varphi &\mapsto (\varphi|_M, (\overline{\varphi|_M})^{-1} \circ \varphi) \end{aligned}$$

とすると, $\Phi = \Psi^{-1}$ である. よって,

$$|\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})| = |\text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \overline{K})| |\text{Hom}_M^{\text{al}}(L, \overline{K})|$$

を得る. また,

$$[L : K]_{\text{ins}} = \frac{[L : K]}{[L : K]_{\text{sep}}} = \frac{[L : M][M : K]}{[L : M]_{\text{sep}}[M : K]_{\text{sep}}} = [L : M]_{\text{ins}}[M : K]_{\text{ins}}$$

■

Thm 5.1

L/K を有限次拡大とする. このとき,

$$[L : K]_{\text{sep}} \leq [L : K]$$

さらに,

$$L/K \text{ が分離拡大} \Leftrightarrow [L : K]_{\text{sep}} = [L : K]$$

Proof. L/K は有限次拡大なので,

$$\exists \alpha_1, \dots, \alpha_n \in L, L = K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$$

このとき,

$$M_0 := M, M_i := M_{i-1}(\alpha_i) \quad (1 \leq i \leq n)$$

とおく. 各 $1 \leq i \leq n$ に対し, M_i/M_{i-1} は代数拡大であるから **Prop 5.8** から

$$[M_i : M_{i-1}]_{\text{sep}} \leq [M_i : M_{i-1}]$$

Prop 5.9 を繰り返して,

$$\begin{aligned} [L : K]_{\text{sep}} &= [M_n : M_0]_{\text{sep}} = [M_n : M_{n-1}]_{\text{sep}} \cdots [M_1 : M_0]_{\text{sep}} \\ &\leq [M_n : M_{n-1}] \cdots [M_1 : M_0] = [M_n : M_0] = [L : K] \end{aligned} \quad (*)$$

(\Rightarrow) L/K が有限次分離拡大のときは各 i に対し $[M_i : M_{i-1}]_{\text{sep}} = [M_i : M_{i-1}]$ なので (*) において \leq が $=$ になる.

(\Leftarrow) $[L : K]_{\text{sep}} = [L : K]$ とする. $\alpha \in L$ に対して,

$$\begin{aligned} |\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})| &= |\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})| |\text{Hom}_{K(\alpha)}^{\text{al}}(L, \overline{K})| \\ &\leq [L : K(\alpha)][K(\alpha) : K] = [L : K] = |\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})| \end{aligned}$$

よって $|\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})| = [K(\alpha) : K]$ であるから, α は K 上分離的. 従って, L/K は分離拡大. ■

Remark 5.6. **Prop 5.8** と **Thm 5.1** 後半より,

$$K(\alpha)/K \text{ が分離拡大} \Leftrightarrow \alpha \text{ が } K \text{ 上分離的}$$

Remark 5.7. L/K が有限次拡大であるとき, $[L : K]_{\text{sep}} \leq [L : K] < \infty$ であるから分離次数は有限値であることがわかる.

Prop 5.10 (分離拡大の推移律)

L/K を体拡大とする.

$$L/M, M/K \text{ が分離拡大} \Leftrightarrow L/K \text{ が分離拡大}$$

$$\text{sep} \left(\begin{array}{c} L \\ | \\ M \\ | \\ K \end{array} \right)_{\text{sep}}$$

Proof. (\Leftarrow) L/K が分離拡大なら $M \subset L$ の元は K 上分離的なので M/K は分離拡大. また,

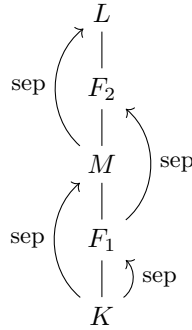
Remark 5.8. 300 より L/M も分離拡大である.

(\Rightarrow) まず $[L : K] < \infty$ の場合, **Prop 5.9** と **Prop 5.1** 後半より,

$$[L : K]_{\text{sep}} = [L : M]_{\text{sep}}[M : K]_{\text{sep}} = [L : M][M : K] = [L : K]$$

従って, **Prop 5.1** より L/K は分離拡大.

一般の場合も有限次拡大に帰着できる. $\alpha \in L$ とする. α の M 上最小多項式を $p(T) = T^n + a_1T^{n-1} + \cdots + a_n$, $F_1 = K(a_1, \dots, a_n)$, $F_2 = F_1(\alpha)$ とする. このとき, α の F_1 上最小多項式は $p(T)$ であることに注意したい. また, $F_2/F_1, F_1/K$ は有限次拡大なので F_2/K も有限次拡大.



M/K は分離拡大かつ $F_1 \subset M$ であるから F_1/K は分離拡大. また L/M は分離拡大なので $p(T)$ は分離的であるから α は F_1 上分離的である. よって *Remark 5.6* より F_2/F_1 は分離拡大.

従って有限次の場合より F_2/K は分離拡大で, α は K 上分離的である. ■

Cor 5.3

$K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)/K$ を有限次拡大とする. $\alpha_1, \dots, \alpha_n$ が K 上分離的なら $K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)/K$ は分離拡大である.

Proof.

$$M_0 := K, M_i := M_{i-1}(\alpha_i) \quad (1 \leq i \leq n)$$

とおく. 各 $1 \leq i \leq n$ に対し, M_i/M_{i-1} は代数拡大であるから **Prop 5.8** から *Remark 5.1* と *Remark 5.6* とより M_i/M_{i-1} は分離拡大. よって **Prop 5.10** から $K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)/K$ は分離拡大. ■

5.4 分離閉包

Def 5.8

L/K を代数拡大とする.

$$L_s := \{\alpha \in L \mid \alpha \text{ is separable over } K\}$$

を L における K の**分離閉包 (separable closure)** という. また $K^{\text{sep}} := (\overline{K})_s$ を K の分離閉包という.

Remark 5.9. $\alpha, \beta \in L_s$ とすると $K(\alpha, \beta)/K$ は分離拡大なので, $\alpha + \beta, \alpha\beta \in L_s, \alpha^{-1} \in L_s (\alpha \neq 0)$. よって L/L_s である. また当然 K の元は K 上分離的なので $L/L_s/K$.

$$\text{alg} \left(\begin{array}{c} L \\ | \\ L_s \\ | \\ K \end{array} \right) \begin{array}{l} \nearrow \text{purely.insep.} \\ \searrow \text{sep} \end{array}$$

$$\text{alg} \left(\begin{array}{c} \overline{K} \\ | \\ K^{\text{sep}} \\ | \\ K \end{array} \right) \begin{array}{l} \nearrow \text{purely.insep.} \\ \searrow \text{sep} \end{array}$$

Remark 5.10. K が完全体 $\Leftrightarrow K^{\text{sep}} = \overline{K}$

Prop 5.11

Def 5.8 の状況で L/L_s は純非分離拡大である.

Proof. $\text{ch } K = 0$ なら $L_s = L$ より明白. $\text{ch } K = p > 0, \alpha \in L$ なら, **Prop 5.4** より,

$$\exists g(T) \in K[T] : K \text{ 上既約分離}, \exists n \geq 0, g(\alpha^{p^n}) = 0$$

よって $\alpha^{p^n} \in L_s$ なので, L/L_s は純非分離拡大である. ■

Prop 5.12

L/K を有限次拡大とする.

- (1) F/K が純非分離拡大なら $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$ に対し, 延長 $\tilde{\varphi} \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(F, \overline{K})$ が unique に存在する.
- (2) $[L_s : K] = [L : K]_{\text{sep}}$
- (3) $[L : L_s] = [L : K]_{\text{ins}}$

Proof. (1) **Thm 4.3** より延長 $\tilde{\varphi}$ が存在する. 一意性を示す. $F = L$ なら明白. $F \neq L$ とする. このとき $\text{ch } F = p > 0$ なので, $\alpha \in F$ とすると, $\exists q \in \{p^n \mid n \geq 0\}, \alpha^q =: \beta \in L$.

よって $\varphi(\alpha)^q = \varphi(\beta)$. 方程式 $T^q = \varphi(\beta)$ の解は 1 つのみなので, $\varphi(\alpha)$ は $\varphi(\beta)$ により定まり, 延長は unique である.

(2) L_s/K は有限次分離拡大なので, $[L_s : K] = [L_s : K]_{\text{sep}}$. (1) より $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L_s, \overline{K})$ の元は $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L_s, \overline{K})$ の元に unique に延長されるので, $[L_s : K]_{\text{sep}} = [L : K]_{\text{sep}}$. 従って $[L_s : K] = [L : K]_{\text{sep}}$.

(3) (2) より,

$$[L : L_s] = \frac{[L : K]}{[L_s : K]} = \frac{[L : K]}{[L : K]_{\text{sep}}} = [L : K]_{\text{ins}}$$

■

5.5 原始元定理

Thm 5.2 (原始元定理)

有限次分離拡大は単拡大である. このときの生成元を**原始元 (primitive element)** という.

Proof. L/K を有限次分離拡大とする.

まず $|K| < \infty$ の場合, $|L| < \infty$ である. L^\times は巡回群なので $\exists \gamma \in L, L^\times = \langle \gamma \rangle$. このとき, $L = K(\gamma)$.

$|L| = \infty$ の場合を次の 2 つの Steps に分けて示す.

Step 1 L/K を有限次分離拡大, $\alpha \in L$ とする.

$$\forall \varphi, \psi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) \quad [\varphi \neq \psi \Rightarrow \varphi(\gamma) \neq \psi(\gamma)]$$

が成り立つとき, $L = K(\gamma)$.

$\gamma \in L$ は条件を満たすとすると, $|\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})| \leq |\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\gamma), \overline{K})|$ であるから,

$$[L : K] = [L : K]_{\text{sep}} \leq [K(\gamma) : K]_{\text{sep}} \leq [K(\gamma) : K]$$

より, $L = K(\gamma)$ である.

Step 2 $|K| = \infty$ のとき, Step 1 の γ は存在する.

$[L : K] = n$ とすると,

$$\exists \alpha_1, \dots, \alpha_n \in L, L = K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$$

であるが, $L = K(\alpha, \beta)$ の場合に

$$\exists \gamma \in L, K(\gamma) = K(\alpha, \beta)$$

を示せば帰納的に示される. $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) = \{\varphi_1, \dots, \varphi_n\}$ とすると, L/K は分離拡大なので, $\varphi_1, \dots, \varphi_n$ は全て異なる.

$$f(T) := \prod_{i \neq j} ((\varphi_i(\alpha) + \varphi_i(\beta)T) - (\varphi_j(\alpha) + \varphi_j(\beta)T)) \in \overline{K}[T]$$

とおく. このとき, $f(T)$ は零多項式ではない.

(\because) $f(T) = 0$ とすると, $i \neq j$ が存在して,

$$\begin{aligned} & (\varphi_i(\alpha) + \varphi_i(\beta)T) - (\varphi_j(\alpha) + \varphi_j(\beta)T) = 0 \\ & \Leftrightarrow (\varphi_i(\alpha) - \varphi_j(\alpha)) + (\varphi_i(\beta) - \varphi_j(\beta))T = 0 \\ & \Leftrightarrow \varphi_i(\alpha) - \varphi_j(\alpha) = \varphi_i(\beta) - \varphi_j(\beta) = 0 \\ & \therefore \varphi_i(\alpha) = \varphi_j(\alpha), \varphi_i(\beta) = \varphi_j(\beta) \end{aligned}$$

$L = K(\alpha, \beta)$ より, $\varphi_i = \varphi_j$ を得る. これは $i \neq j \Rightarrow \varphi_i \neq \varphi_j$ に矛盾.

零でない多項式の根は有限個であり, $|K| = \infty$ なので, $f(c) \neq 0$ なる $c \in K$ が取れる. このとき, $\gamma := \alpha + c\beta$ とすれば, $i \neq j$ のとき,

$$\varphi_i(\gamma) = \varphi_i(\alpha) + c\varphi_i(\beta) \neq \varphi_j(\alpha) + c\varphi_j(\beta) = \varphi_j(\gamma)$$

よって,

$$\varphi_i \neq \varphi_j \Rightarrow \varphi_i(\gamma) \neq \varphi_j(\gamma)$$

以上より, $K(\alpha, \beta) = K(\gamma)$ ■

Example 5.5. $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3}) = \mathbb{Q}(\sqrt{2} + \sqrt{3})$

6 Galois 拡大

6.1 正規拡大

Def 6.1

L/K を代数拡大とする. 任意の $\alpha \in L$ に対して α の K 上最小多項式 $p(T)$ が L 上で 1 次式の積に分解できるとき, L/K を **正規拡大 (normal extension)** という.

Remark 6.1. L/K が正規拡大とは, 任意の $\alpha \in L$ に対し, α の K 上共軛が全て L に属すること, と言い換えられる.

Example 6.1. $\mu(d) = 0$ とする. ${}^{\dagger 12}\mathbb{Q}(\sqrt{d})/\mathbb{Q}$ は正規拡大. 実際, \sqrt{d} の \mathbb{Q} 上最小多項式は $T^2 - d$ であり, \mathbb{Q} 上共軛 $\pm\sqrt{d}$ は $\mathbb{Q}(\sqrt{d})$ に属する.

Example 6.2. $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2})/\mathbb{Q}$ は正規拡大でない. 実際, $\sqrt[3]{2}$ の \mathbb{Q} 上最小多項式は $T^3 - 2$ であり, $\sqrt[3]{2}\omega \notin \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2})$ を \mathbb{Q} 上共軛に持つ.

Prop 6.1

L/K を有限次拡大とする. このとき (1),(2) は同値

- (1) L/K は正規拡大
- (2) $\forall \varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}), \varphi(L) \subset L$

Proof. (1) \Rightarrow (2) $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}), \alpha \in L$ とする. $\varphi(\alpha)$ は α の K 上の共軛であるから仮定より $\varphi(\alpha) \in L$. よって $\varphi(L) \subset L$

(2) \Rightarrow (1) $\alpha \in L$ とし, $\beta \in \overline{K}$ を α の K 上の共軛とする. このとき, Prop より

$$\exists \varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}), \varphi(\alpha) = \beta$$

仮定 $\varphi(L) \subset L$ より $\beta \in L$. よって L/K は正規拡大. ■

Cor 6.1

L/K を代数拡大, $L = K(\alpha_1 \cdots, \alpha_n)$ とする. $\alpha_1 \cdots, \alpha_n$ の K 上の共軛が全て L に属するとき, L/K は正規拡大である.

Proof. $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$ とすると, 仮定より $\varphi(\alpha_1), \dots, \varphi(\alpha_n) \in L$. K 準同型は K 上の生成元で決定され, $\varphi(L) = K(\varphi(\alpha_1), \dots, \varphi(\alpha_n)) \subset L$ が従う. **Prop 6.1** より L/K は正規拡大である. ■

^{†12} μ は Möbius 関数.

Def 6.2

L/K を代数拡大とするとき, L を含む K の最小の正規拡大体を L の K 上の**正規閉包** (normal closure) といい, $\text{NC}_K(L)$ で表す.

Remark 6.2. 正規閉包 $\text{NC}_K(L)$ は (\overline{K}) において L の全ての元の全ての K 上共軛を L に添加して得られる.

Prop 6.2

$L = K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$ のとき, $\text{NC}_K(L)$ は $\alpha_1, \dots, \alpha_n$ の全ての K 上共軛を L に添加して得られる.

Proof. F を $\alpha_1, \dots, \alpha_n$ の全ての K 上共軛を L に添加した体とすると, **Cor 6.1** により, F/K は正規拡大. よって $\text{NC}_K(L)$ の定義から, $\text{NC}_K(L) \subset F$. また, $F \subset \text{NC}_K(L)$ は明白なので $\text{NC}_K(L) = F$. ■

Example 6.3. $L = \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2})$ とすると, L の \mathbb{Q} 上の正規閉包は

$$\text{NC}_K(L) = \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \sqrt[3]{2}\omega, \sqrt[3]{2}\omega^2) = \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)$$

Prop 6.3

$L_1/K, L_2/K$ を代数拡大とする. 次は同値.

- (1) L_1 と L_2 は K 同型
- (2) $\exists \sigma \in \text{Aut}_K^{\text{al}}(\overline{K}), \sigma(L_1) = L_2$
- (3) $\exists \varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L_1, \overline{K}), \varphi(L_1) = L_2$

このとき, L_1 と L_2 は K 上の**共軛体** (conjugate field) という.

Proof. (1) \Rightarrow (2) $\sigma_0 : L_1 \rightarrow L_2$ を K 同型とすると, **Thm 4.3** より σ_0 の拡張 $\sigma \in \text{Aut}_K^{\text{al}}(\overline{K})$ があって, $\sigma(L_1) = L_2$.

(2) \Rightarrow (3) $\varphi := \sigma|_{L_1}$ とすればよい.

(3) \Rightarrow (1) φ の終域を L_2 に設定し直せばよい. ■

Example 6.4. $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)$ の中間体 $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}), \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega), \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega^2)$ はそれぞれ \mathbb{Q} 上の共軛体である. 例えば, $\sigma : \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}) \rightarrow \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega), \sqrt[3]{2} \mapsto \sqrt[3]{2}\omega$ としたとき, $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega) = \sigma(\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}))$ である.

Remark 6.3. L/K が正規拡大 $\Leftrightarrow L$ の K 上の共軛体は L 自身のみ

6.2 Galois 拡大

Def 6.3

代数拡大 L/K が分離拡大かつ正規拡大であるとき, L/K は **Galois 拡大 (Galois extension)** という. このとき,

$$\mathrm{Gal}(L/K) := \mathrm{Aut}_K^{\mathrm{al}}(L)$$

を L/K の **Galois 群 (Galois group)** という.

$\mathrm{Gal}(L/K)$ が Abel 群であるとき, L/K を **Abel 拡大 (abelian extension)** という.

$\mathrm{Gal}(L/K)$ が巡回群であるとき, L/K を **巡回拡大 (cyclic extension)** という.

Example 6.5. $\mu(d) = 0$ とする. $\mathbb{Q}(\sqrt{d})/\mathbb{Q}$ は 2 次 Galois 拡大であり, $\mathrm{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt{d})/\mathbb{Q}) \cong C_2$ なので特に巡回拡大. また, $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3}, \sqrt{5}, \dots)/\mathbb{Q}$ は無限次の Galois 拡大.

Example 6.6. $\mathbb{F}_p(\sqrt[p]{X})/\mathbb{F}_p(X)$ は正規だが分離でないので Galois 拡大でない. 実際, $\sqrt[p]{X}$ の $\mathbb{F}_p(X)$ 上最小多項式は $T^p - X = (T - \sqrt[p]{X})^p$ であるから, 分離拡大ではない. しかし, $\mathbb{F}_p(X)$ 上共軛は $\sqrt[p]{X}$ のみであるから **Cor 6.1** より正規拡大.

Remark 6.4. 体 K に対し, K^{sep}/K は Galois 拡大である. Galois 群

$$G_K := \mathrm{Gal}(K^{\mathrm{sep}}/K)$$

を K の **絶対 Galois 群 (absolute Galois group)** という.

Def 6.4

K を体とする. $K^{\mathrm{sep}}/L/K$ なる L に対し, $\tilde{L} := \mathrm{NC}_K(L)$ は K の Galois 拡大体であり, これを L の K 上の **Galois 閉包 (Galois closure)** という.

以降では主に有限次 Galois 拡大について考える.

Prop 6.4

L/K は有限次拡大とする.

- (1) $\mathrm{Hom}_K^{\mathrm{al}}(L, L) = \mathrm{Aut}_K^{\mathrm{al}}(L)$
- (2) L/K が分離拡大のとき, $|\mathrm{Aut}_K^{\mathrm{al}}(L)| \leq [L : K]$

Proof. (1) (⊃) は明白. $\sigma \in \mathrm{Hom}_K^{\mathrm{al}}(L, L)$ とすると, σ は単射. よって σ は同次元の有限次 K 線型空間の間の単射線型写像なので同型である.

(2) $\text{Aut}_K^{\text{al}}(L) = \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, L) \subset \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$ であり, L/K が有限次分離拡大なら,

$$|\text{Aut}_K^{\text{al}}(L)| \leq |\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})| = [L : K]$$

■

Example 6.7. $\mathbb{Q}(T)/\mathbb{Q}$ は無限次拡大である. $\varphi \in \text{Hom}_{\mathbb{Q}}^{\text{al}}(\mathbb{Q}(T), \mathbb{Q}(T))$ を $T \mapsto T^2$ で定めると, これは全射でないので $\varphi \notin \text{Aut}_{\mathbb{Q}}^{\text{al}}(\mathbb{Q}(T))$. よって $\text{Hom}_{\mathbb{Q}}^{\text{al}}(\mathbb{Q}(T), \mathbb{Q}(T)) \supsetneq \text{Aut}_{\mathbb{Q}}^{\text{al}}(\mathbb{Q}(T))$.

Prop 6.5

L/K を有限次分離拡大のとき, 以下は同値.

- (1) L/K が Galois 拡大
- (2) $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) = \text{Aut}_K^{\text{al}}(L)$
- (3) $|\text{Aut}_K^{\text{al}}(L)| = [L : K]$

特に, 有限次 Galois 拡大 L/K に対し,

$$\text{Gal}(L/K) = \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}), \quad |\text{Gal}(L/K)| = [L : K]$$

である.

Proof. (1) \Rightarrow (2) (3) は明らか. $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$ とすると, L/K は正規拡大なので, $\varphi(L) \subset L$. よって $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, L) = \text{Aut}_K^{\text{al}}(L)$ であり, $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) \subset \text{Aut}_K^{\text{al}}(L)$.

(2) \Rightarrow (1) $\alpha \in L$ とし, $\beta \in \overline{K}$ をその K 上の共軛とする. このとき, K 同型 $\varphi : K(\alpha) \rightarrow K(\beta)$ が存在する. **Prop 5.1**(1) より, φ は $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$ の元へ延長できるが, $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) = \text{Aut}_K^{\text{al}}(L)$ なので, $\beta \in K(\beta) \subset L$. よって L/K は正規拡大であり, Galois 拡大である.

(2) \Leftrightarrow (3) **Prop 6.4**(2) と **Prop 5.1**(2) より,

$$|\text{Aut}_K^{\text{al}}(L)| = [L : K] \Leftrightarrow \text{Aut}_K^{\text{al}}(L) = \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$$

■

Cor 6.2

L/K が有限次 Galois 拡大, $L/M/K$ のとき, L/M も Galois 拡大であり,

$$\text{Gal}(L/M) \geq \text{Gal}(L/K)$$

$$\begin{array}{c} L \\ \uparrow \text{fin. Gal} \quad \uparrow \text{fin. Gal} \\ M \\ \uparrow \text{fin. Gal} \\ K \end{array}$$

Proof. Remark 5.1 より, L/M は分離拡大. $L = K(\alpha_1 \cdots, \alpha_n)$ とすると, L は $\alpha_1 \cdots, \alpha_n$ の K 上共軛を全て含む. $\alpha_1 \cdots, \alpha_n$ の M 上共軛は K 上共軛でもあるので, **Cor 6.1** より, L/M は正規拡大. よって L/M も Galois 拡大.

また, $K \subset M$ なので, $\sigma \in \text{Gal}(L/M)$ は K の元を動かさない. よって $\sigma \in \text{Gal}(L/K)$ で, $\text{Gal}(L/M) \geq \text{Gal}(L/K)$ が従う. ■

Prop 6.6

L/K を有限次拡大とする. 以下は同値.

- (1) L/K は Galois 拡大
- (2) L はある分離多項式 $f(T) \in K[T]$ の最小分解体

Proof. (1) \Rightarrow (2) L/K は有限次分離拡大であるから, $\exists \alpha \in L, L = K(\alpha)$
 $p(T)$ を α の K 上最小多項式とすると, これは分離多項式である.

$$\exists \alpha_i \in \overline{K}, p(T) = (T - \alpha)(T - \alpha_2) \cdots (T - \alpha_n)$$

L/K が正規拡大であることから, $K(\alpha, \alpha_2, \cdots, \alpha_n) \subset L = K(\alpha)$. また, 逆の包含は明らかなので, $K(\alpha, \alpha_2, \cdots, \alpha_n) = L$ であり, L は $p(T)$ の最小分解体.

(2) \Rightarrow (1) L は分離多項式 $f(T) = (T - \alpha_1) \cdots (T - \alpha_n) \in K[T]$ の最小分解体とすると, $L = K(\alpha_1, \cdots, \alpha_n)$ である. $\alpha_1, \cdots, \alpha_n$ は K 上分離的である.

(\because) $p_i(T)$ を α_i の K 上最小多項式とすると, $p_i(T) | f(T)$. $f(T)$ は分離多項式なので $p_i(T)$ も分離多項式.

よって L/K は分離拡大である. また, α_i の K 上共軛はある $\alpha_j \in L$ なので **Cor 6.1** より, L/K は正規拡大でもある. よって L/K は Galois 拡大. ■

7 Galois の基本定理

7.1 Galois 群の作用

Def 7.1

X を集合, $\mathfrak{S}(X)$ を X 上の対称群, G を群とする. 群準同型 $\rho: G \rightarrow \mathfrak{S}(X)$ が存在するとき, G は X に作用する (act) といひ $G \curvearrowright X$ とかく. このとき,

$$a_\rho: G \times X \rightarrow X, (g, x) \mapsto \rho(g)(x)$$

を G の X への作用 (action), ρ を G の置換表現 (permutation representation) という. また G を変換群 (transformation group), X を G 空間 (G -space) という. $x \in X, g \in G$ に対し, ρ を省略して $\rho(g)(x)$ を gx と表すことが多い.

$x \in X$ に対し,

- (a1) $\text{Orb}_G(x) := \{gx \in X \mid g \in G\}$ を x の G 軌道 (G -orbit) という.
- (a2) $\text{Stab}_G(x) := \{g \in G \mid gx = x\} \leq G$ を x の固定化部分群 (stabilizer) という.
- (a3) $\text{Orb}_G(x) = \{x\}$ となるとき, x を固定点 (fixed point) という. 固定点全体を固定点集合 (fixed point set) といひ, X^G で表す.
- (b1) $\exists x \in X, \text{Orb}_G(x) = X$ となるとき, $G \curvearrowright X$ は推移的 (transitive) であるという.
- (b2) $\forall x \in X, \text{Stab}_G(x) = \{1\}$ となるとき, $G \curvearrowright X$ は自由 (free) であるという.
- (b3) $G \curvearrowright X$ が推移的かつ自由であるとき正則 (regular) であるという.
- (b4) ρ が単射のとき, $G \curvearrowright X$ は忠実 (faithful) であるという.^{†13}

Remark 7.1. $G \curvearrowright X$ とする. $x, y \in X$ に対し,

$$x \sim y \Leftrightarrow \exists g \in G, y = gx$$

と定める^{†14}とこれは同値関係であり, $X/G := X/\sim$ を X の G による軌道空間 (orbit space) という. G 軌道は軌道空間の元として定義することもできる.

Remark 7.2 (Orbit-stabilizer theorem). $G \curvearrowright X$ とする. $x \in X$ に対し,

$$G/\text{Stab}_G(x) \rightarrow \text{Orb}_G(x), g\text{Stab}_G(x) \mapsto gx$$

^{†13} $x \in X$ が固定点 $\Leftrightarrow \text{Stab}_G(x) = G \Leftrightarrow \forall g \in G, gx = x$

$G \curvearrowright X$ が推移的 $\Leftrightarrow \forall x, y \in X, \exists g \in G, y = gx$

$G \curvearrowright X$ が正則 $\Leftrightarrow \forall x, y \in X, \exists! g \in G, y = gx$

$G \curvearrowright X$ が忠実 $\Leftrightarrow (\rho(g) = \text{id}_X \Rightarrow g = 1)$

^{†14} $x \sim y \Leftrightarrow \exists g \in G, y = gx \Leftrightarrow y \in \text{Orb}_G(x) \Leftrightarrow \text{Orb}_G(x) = \text{Orb}_G(y) \Leftrightarrow \text{Orb}_G(x) \cap \text{Orb}_G(y) \neq \emptyset$

は well-defined な全単射である.^{†15}特に,

$$(G : \text{Stab}_G(x)) = |G|/|\text{Stab}_G(x)| = |\text{Orb}_G(x)|$$

Remark 7.3. 作用が自由なら忠実である.

(\because) ρ による作用 $G \curvearrowright X$ は自由とする.

$$\begin{aligned} \text{Ker } \rho &= \{g \in G \mid \rho(g) = \text{id}_X\} \\ &= \{g \in G \mid \forall x \in X, \rho(g)(x) = x\} \\ &= \{g \in G \mid \forall x \in X, g \in \text{Stab}_G(x)\} \\ &= \{g \in G \mid \forall x \in X, g = 1\} = \{1\} \end{aligned}$$

Example 7.1. G を群とする. $L : G \rightarrow \mathfrak{S}(G), g \mapsto L_g$ を $L_g(h) = gh$ で定めると, L によって $G \curvearrowright G$. この作用は正則である. 特に忠実であることから任意の群はある対称群に埋込み可能, すなわちある対称群の部分群に同型であることが従う. (**Cayley の定理**)

Example 7.2. G を群とする. $\text{Ad} : G \rightarrow \mathfrak{S}(G), g \mapsto \text{Ad}_g$ を $\text{Ad}_g(h) = g^{-1}hg$ で定めると, Ad によって $G \curvearrowright G$. この作用を G 上の**共轭作用 (conjugation)** という.^{†16}

$$\text{Ker } \text{Ad} = \{g \in G \mid \forall h \in G, g^{-1}hg = h\} = Z(G) \text{ より, } \text{Ad が忠実} \Leftrightarrow Z(G) = \{1\}$$

$G \neq \{1\}$ なら $\text{Orb}_G(1) = \{1\}$ より推移的でない.

$G \neq \{1\}$ なら $\text{Stab}_G(1) = G$ より自由でない.

また固定点集合は

$$G^G = \{h \in G \mid \forall g \in G, g^{-1}hg = h\} = Z(G)$$

である.

Def 7.2

k, A を可換環, A を k 代数, G を群とする. 群準同型 $\rho : G \rightarrow \text{Aut}_k^{\text{al}} A$ が存在するとき, G は A に k 上作用する (**act over k**) という.^{†17}

Remark 7.4. 任意の可換環 A は \mathbb{Z} 代数なので群準同型 $\rho : G \rightarrow \text{Aut}^{\text{al}}(A)$ は \mathbb{Z} 上の作用. 同様に, 任意の体 L は素体 K 上の代数なので群準同型 $\rho : G \rightarrow \text{Aut}^{\text{al}}(L)$ は K 上の作用.

Example 7.3. L/K を体拡大とする. $\text{id} : \text{Aut}_K^{\text{al}} L \rightarrow \text{Aut}_K^{\text{al}} L$ によって $\text{Aut}_K^{\text{al}}(L)$ は L に忠実に K 上作用する. 特に L/K が Galois 拡大のとき, $\text{Gal}(L/K) \curvearrowright L$ は忠実作用.

^{†15} 一般に $\text{Stab}_G(x) \not\leq G$ なので $G/\text{Stab}_G(x)$ は群ではない.

^{†16} $\text{Ad}_g : G \rightarrow G$ は同型であり, $\text{Ad} : G \rightarrow \text{Aut}(G)$ とできる.

^{†17} $\text{Aut}_K^{\text{al}}(L) \leq \mathfrak{S}(L)$ なので k 上の作用は当然作用である.

Def 7.3

K を体, $f(T) \in K[T]$ を分離多項式とする. $f(T)$ の根を $\alpha_1, \dots, \alpha_n \in \overline{K}$ とすると, $L = K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$ は $f(T)$ の最小分解体である. このとき L/K は正規かつ分離なので Galois 拡大である. $\text{Gal}(L/K)$ を $f(T)$ の Galois 群といい, $\text{Gal}(f/K)$ で表す.

Remark 7.5. $\rho: \text{Gal}(f/K) \rightarrow \mathfrak{S}(\{\alpha_1, \dots, \alpha_n\}) \cong \mathfrak{S}_n$ を $\rho(\sigma) = \sigma|_{\{\alpha_1, \dots, \alpha_n\}}$ によって定めると, $\text{Gal}(f/K) \curvearrowright \{\alpha_1, \dots, \alpha_n\}$ である. この作用は忠実なので

$$\text{Gal}(f/K) \leq \mathfrak{S}(\{\alpha_1, \dots, \alpha_n\}) \cong \mathfrak{S}_n$$

と見做せる.

Prop 7.1

Def 7.3 の状況において, 次は同値.

- (1) $f(T)$ は K 上既約
- (2) 作用 $\text{Gal}(f/K) \curvearrowright \{\alpha_1, \dots, \alpha_n\}$ は推移的

Proof. (1) \Rightarrow (2) **Prop 4.3** より従う.

(2) \Rightarrow (1) α_1 の K 上最小多項式を $g(T)$ と, $g(T) \mid f(T)$ である. また $\sigma \in \text{Gal}(f/K)$, $\sigma(\alpha_1) = \alpha_i$ とすると **Prop 4.3** より α_i は α_1 の K 上共軛. 推移的作用の仮定から $\alpha_1, \dots, \alpha_n$ は α_1 の K 上共軛であるから, $f(T) \mid g(T)$. よって $\exists c \in K^\times$, $f(T) = cg(T)$ で $f(T)$ は K 上既約. ■

Example 7.4. $f(T) = (T^2 - 2)(T^2 - 3) \in \mathbb{Q}[T]$ とすると, $L = \mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3})$ で, $\text{Orb}_{\text{Gal}(f/\mathbb{Q})}(\sqrt{2}) = \{\pm\sqrt{2}\}$ より $\text{Gal}(f/\mathbb{Q}) \curvearrowright \{\pm\sqrt{2}, \pm\sqrt{3}\}$ は推移的でない.

Def 7.4

L を体, G を有限群とし, 群準同型 $\rho: H \hookrightarrow \text{Aut}^{\text{al}}(L)$ によって忠実に $H \curvearrowright L$ とする. この作用の固定点集合

$$L^H := \{x \in L \mid \forall \sigma \in H, \sigma(x) = x\}$$

を H の固定体 (fixed field) または不変体という.

Example 7.5. $L = \mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3})$, $H = \{\text{id}_L, \sigma\} \leq \text{Aut}^{\text{al}}(L)$ とする. 但し, σ は

$$\sigma(\sqrt{2}) = -\sqrt{2}, \sigma(\sqrt{3}) = \sqrt{3}$$

で定まる \mathbb{Q} 自己同型とする. このとき, $L^H = \mathbb{Q}(\sqrt{3})$.

Thm 7.1 (Artin の定理)

L/K を有限次 Galois 拡大, $H \leq \text{Gal}(L/K)$ とすると, 忠実に $H \curvearrowright L$ である. このとき L/L^H は Galois 拡大であり,

$$[L : L^H] = |H|, \text{Gal}(L/L^H) = H$$

Proof. $L/L^H/K$ なので, **Cor 6.2** より, L/L^H も有限次 Galois 拡大. 有限次分離拡大は単拡大なので, $\exists \alpha \in L, L = L^H(\alpha)$. ここで

$$f(T) = \prod_{\sigma \in H} (T - \sigma(\alpha)) \in L[T]$$

とする. $\tau \in \text{Gal}(L/K)$ は自己準同型 $L[T] \rightarrow L[T], g(T) \rightarrow \tau(g)(T)$ を誘導する.

$$\tau(f)(T) = \prod_{\sigma \in H} (T - \tau(\sigma(\alpha)))$$

$\tau \in H$ のとき, $\tau H = H$ なので, $\tau(f)(T) = f(T)$. つまり $f(T)$ の係数は $\tau \in H$ で動かず, $f(T) \in L^H(T)$. $f(\alpha) = 0$ であり, $f(T)$ は $|H|$ 次多項式なので, $[L : L^H] \leq |H|$ である. また, $H \subset \text{Gal}(L/L^H)$ に注意すれば,

$$|H| \leq |\text{Gal}(L/L^H)| = [L : L^H] \leq |H|$$

よって結論を得る. ■

Remark 7.6. 一般に体 L と有限部分群 $H \leq \text{Aut}^{\text{al}}(L)$ に対して成立する.

Def 7.5

L/K を有限次 Galois 拡大とする. $L/M/K$ に対して,

$$\Gamma(M) := \{\sigma \in \text{Gal}(L/K) : \sigma|_M = \text{id}_M\}$$

を M の固定化部分群 (stabilizer) または不変部分群 (invariant subgroup) と言う.^{†18}

Remark 7.7. **Cor 6.2** より, L/M は Galois 拡大であり, $\Gamma(M) = \text{Gal}(L/M)$

^{†18} 作用 $G \curvearrowright X$ の固定化部分群を 1 点 $x \in X$ に対して定義したが, 同様に $S \subset X$ に対しても

$$\text{Stab}_G(S) := \{g \in G \mid \rho(g)|_S = \text{id}_S\}$$

と定義できる. これを用いれば, $\text{Gal}(L/K) \curvearrowright M$, $\Gamma(M) = \text{Stab}_{\text{Gal}(L/K)}(M)$ である.

7.2 Galois の基本定理

Thm 7.2 (Galois の基本定理)

L/K を有限次 Galois 拡大とする.

$$\mathcal{F} := \{M : L/M/K\}, \mathcal{G} := \{H : H \leq \text{Gal}(L/K)\}$$

とする. 写像 Γ, Φ を,

$$\Gamma : \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{G}, M \mapsto \Gamma(M)$$

$$\Phi : \mathcal{G} \rightarrow \mathcal{F}, H \mapsto L^H$$

により定める. このとき,

$$(1) [L : M] = |\Gamma(M)|, [L : \Phi(H)] = |H|$$

$$(2) \Gamma, \Phi \text{ は互いに逆写像である. つまり,}$$

$$\Phi \circ \Gamma = \text{id}_{\mathcal{F}}, \Gamma \circ \Phi = \text{id}_{\mathcal{G}}$$

この対応 (Γ, Φ) を **Galois 対応 (Galois correspondence)** という.

$$(3) M_1, M_2 \in \mathcal{F} \text{ と } H_1, H_2 \in \mathcal{G} \text{ に対し,}$$

$$M_1 \subset M_2 \Rightarrow \Gamma(M_1) \geq \Gamma(M_2)$$

$$H_1 \leq H_2 \Rightarrow \Phi(H_1) \supset \Phi(H_2)$$

$$\begin{array}{ccc} L & \text{-----} & \{1\} \\ | & & | \\ M & \xrightarrow{\Gamma} & \Gamma(M) \\ | & & | \\ K & \text{-----} & \text{Gal}(L/K) \end{array}$$

$$\begin{array}{ccc} L & \text{-----} & \{1\} \\ | & & | \\ L^H & \xleftarrow{\Phi} & H \\ | & & | \\ K & \text{-----} & \text{Gal}(L/K) \end{array}$$

Proof. (1) Artin の定理を書き直しただけである.

- (2) (a) $\alpha \in M$ とすると, $\forall \sigma \in \Gamma(M), \sigma(\alpha) = \alpha$ なので, $\alpha \in \Phi(\Gamma(M))$. よって, $M \subset \Phi \circ \Gamma(M)$. さらに,

$$[L : M] = |\text{Gal}(L/M)| \stackrel{\downarrow}{=} [L : L^{\text{Gal}(L/M)}] = [L : \Phi \circ \Gamma(M)] \geq [L : M]$$

従って, $[L : M] = [L : \Phi \circ \Gamma(M)]$ であり, $\Phi \circ \Gamma(M) = M$

- (b) $\sigma \in H$ とすると, $\forall \alpha \in \Phi(H), \sigma(\alpha) = \alpha$ なので, $\alpha \in \Gamma(\Phi(H))$. よって, $H \subset \Gamma \circ \Phi(H)$. さらに,

$$|H| \stackrel{\downarrow}{=} [L : L^H] = |\text{Gal}(L/L^H)| = |\Gamma \circ \Phi(H)| \geq |H|$$

従って, $|H| = |\Gamma \circ \Phi(H)|$ であり, $\Gamma \circ \Phi(H) = H$.

但し, \downarrow において Artin の定理 (もしくは (1)) を用いた.

- (3) **Cor 6.2** で $M = M_2, K = M_1$ として前半を得る. また, $\alpha \in \Phi(H_2)$ とすると, H_2 の元で固定される. $H_1 \subset H_2$ より α は H_1 の元でも固定されるので, $\alpha \in \Phi(H_1)$. よって $\Phi(H_1) \supset \Phi(H_2)$

■

Example 7.6. $L = \mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3})$ とすると L/\mathbb{Q} は Galois 拡大である. $\sigma, \tau \in \text{Gal}(L/\mathbb{Q})$ を,

$$\sigma(\sqrt{2}) = -\sqrt{2}, \sigma(\sqrt{3}) = \sqrt{3}$$

$$\tau(\sqrt{2}) = \sqrt{2}, \tau(\sqrt{3}) = -\sqrt{3}$$

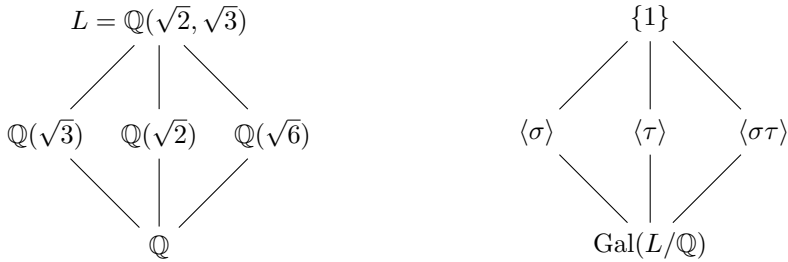
で定まる \mathbb{Q} 自己同型とする. このとき,

$$\sigma\tau(\sqrt{2}) = -\sqrt{2}, \sigma\tau(\sqrt{3}) = -\sqrt{3}$$

である. $[L : \mathbb{Q}] = [L : \mathbb{Q}(\sqrt{2})][\mathbb{Q}(\sqrt{2}) : \mathbb{Q}] = 2 \cdot 2 = 4$ から, $\text{Gal}(L/\mathbb{Q}) = \{1, \sigma, \tau, \sigma\tau\}$ である. さらに $\sigma^2 = \tau^2 = 1, \sigma\tau = \tau\sigma$ であるから,

$$\text{Gal}(L/\mathbb{Q}) \cong \mathbb{Z}/(2) \times \mathbb{Z}/(2)$$

Galois 対応は,



Remark 7.8. $(X, \preceq), (Y, \succeq)$ を半順序集合とする. $\gamma : X \rightarrow Y, \varphi : Y \rightarrow X$ の組 (γ, φ) が次の条件を充たすとき, (γ, φ) を **Galois 系 (Galois connection)** という.

- (1) $x, y \in X, z, w \in Y$ に対し,

$$x \preceq y \Rightarrow \gamma(x) \succeq \gamma(y), \quad z \preceq w \Rightarrow \varphi(z) \succeq \varphi(w)$$

- (2) $x \in X, y \in Y$ に対し,

$$x \preceq \varphi \circ \gamma(x), \quad y \preceq \gamma \circ \varphi(y)$$

Galois の基本定理から Galois 対応 (Γ, Φ) は Galois 系である.

Def 7.6

G を群とする. $H_1, H_2 \leq G$ が G における共軛部分群 (conjugate subgroup) であるとは,

$$\exists \sigma \in G, H_2 = \sigma^{-1} H_1 \sigma$$

Example 7.7. \mathfrak{S}_3 の部分群 $\langle (1\ 2) \rangle, \langle (1\ 3) \rangle, \langle (2\ 3) \rangle$ はそれぞれ共軛部分群である. 例えば, $\langle (1\ 3) \rangle = (2\ 3)^{-1} \langle (1\ 2) \rangle (2\ 3)$ である.

Prop 7.2

Thm 7.2 と同じ状況とする. $M_1, M_2 \in \mathcal{F}$ とする. 次は同値.

- (a1) M_1, M_2 は K 上の共軛体
- (a2) $\text{Gal}(L/M_1), \text{Gal}(L/M_2)$ は $\text{Gal}(L/K)$ における共軛部分群

特に, $M \in \mathcal{F}$ に対し, 次は同値.

- (b1) M/K が Galois 拡大
- (b2) $\text{Gal}(L/M) \trianglelefteq \text{Gal}(L/K)$

このとき, $\text{Gal}(M/K) \cong \text{Gal}(L/K) / \text{Gal}(L/M)$

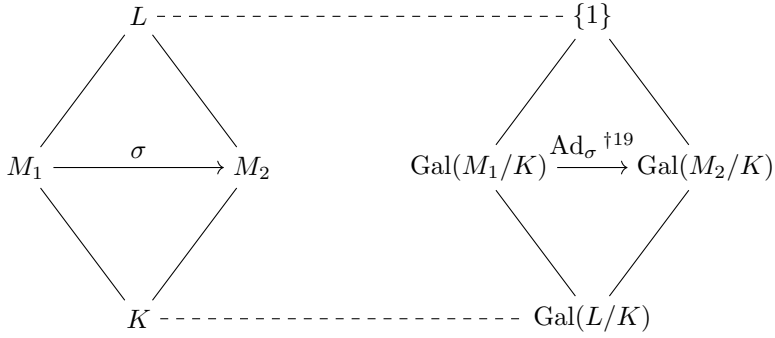
Proof. (a1) \Leftrightarrow (a2) $\sigma \in \text{Gal}(L/K)$ とする. このとき,

$$\begin{aligned} \sigma(M_1) \subset M_2 &\Leftrightarrow \forall \alpha \in M_1, \sigma(\alpha) \in M_2 \\ &\Leftrightarrow \forall \alpha \in M_1, \forall \tau \in \text{Gal}(L/M_2), \tau(\sigma(\alpha)) = \sigma(\alpha) \\ &\Leftrightarrow \forall \alpha \in M_1, \forall \tau \in \text{Gal}(L/M_2), \sigma^{-1} \tau \sigma(\alpha) = \alpha \\ &\Leftrightarrow \forall \tau \in \text{Gal}(L/M_2), \sigma^{-1} \tau \sigma \in \text{Gal}(L/M_1) \\ &\Leftrightarrow \sigma^{-1} \text{Gal}(L/M_2) \sigma \subset \text{Gal}(L/M_1) \end{aligned}$$

また, $\sigma^{-1}(M_2) \subset M_1$ に置き換えれば,

$$(\sigma^{-1})^{-1} \text{Gal}(L/M_1) \sigma^{-1} \subset \text{Gal}(L/M_2) \text{ i.e. } \sigma^{-1} \text{Gal}(L/M_2) \sigma \supset \text{Gal}(L/M_1)$$

を得る. よって, $M_2 = \sigma(M_1) \Leftrightarrow \sigma^{-1} \text{Gal}(L/M_2) \sigma = \text{Gal}(L/M_1)$ である.



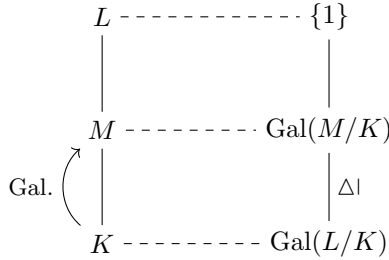
(b1) \Leftrightarrow (b2) $M \in \mathcal{F}$ に対し,

$$\begin{aligned}
 M/K \text{ は Galois 拡大} &\Leftrightarrow M \text{ の任意の共軛体が } M \\
 &\Leftrightarrow \forall \sigma \in \text{Gal}(L/K), \sigma(M) = M \\
 &\Leftrightarrow \forall \sigma \in \text{Gal}(L/K) = \sigma^{-1} \text{Gal}(L/M) \sigma = \text{Gal}(L/M) \\
 &\Leftrightarrow \text{Gal}(L/M) \trianglelefteq \text{Gal}(L/K)
 \end{aligned}$$

このとき, 制限を対応させる写像 $\pi : \text{Gal}(L/K) \rightarrow \text{Gal}(M/K), \sigma \mapsto \sigma|_M$ は well-defined な全射準同型である. $\text{Ker } \pi = \text{Gal}(L/M)$ であるから,

$$\text{Gal}(M/K) \cong \text{Gal}(L/K) / \text{Gal}(L/M)$$

を得る. ■



Example 7.8. $L = \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)$ とすると L/\mathbb{Q} は Galois 拡大である.

$$[L : \mathbb{Q}] = [L : \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2})][\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}) : \mathbb{Q}] = \deg(T^2 + T + 1) \deg(T^3 - 2) = 2 \cdot 3 = 6$$

であるから, Remark 7.5 より $\text{Gal}(L/\mathbb{Q}) \cong \mathfrak{S}_3$ である. $\sigma, \tau \in \text{Gal}(L/\mathbb{Q})$ を,

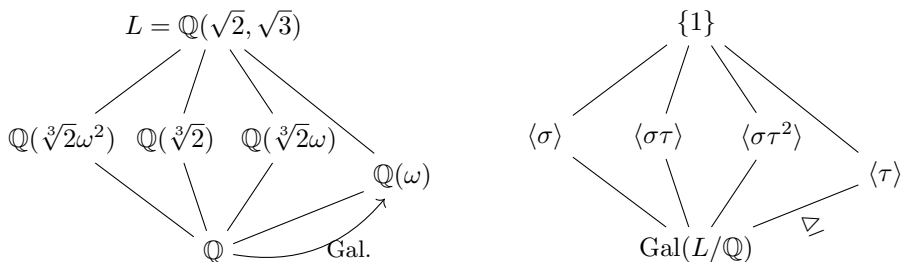
$$\begin{aligned}
 \sqrt[3]{2} &\xrightarrow{\sigma} \sqrt[3]{2}\omega \xrightarrow{\sigma} \sqrt[3]{2}, \quad \sqrt[3]{2}\omega^2 \xrightarrow{\sigma} \sqrt[3]{2}\omega^2 \\
 \sqrt[3]{2} &\xrightarrow{\tau} \sqrt[3]{2}\omega \xrightarrow{\tau} \sqrt[3]{2}\omega^2 \xrightarrow{\tau} \sqrt[3]{2}
 \end{aligned}$$

^{†19} 群 G と $\sigma \in G$ に対し, Ad_σ は σ による共軛作用 $\text{Ad}_\sigma : G \rightarrow G, \tau \mapsto \sigma^{-1}\tau\sigma$ を表す.

で定まる \mathbb{Q} 自己同型とする. $(\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3) := (\sqrt[3]{2}, \sqrt[3]{2}\omega, \sqrt[3]{2}\omega^2)$ とし, 群同型 ρ を

$$\rho : \text{Gal}(f/K) \xrightarrow{\cong} \mathfrak{S}_n, \mu(\alpha_i) = \alpha_{\rho(\mu)(i)}$$

で定めれば, $\sigma \leftrightarrow (1\ 2), \tau \leftrightarrow (1\ 2\ 3)$ と対応する. よって Galois 対応は,

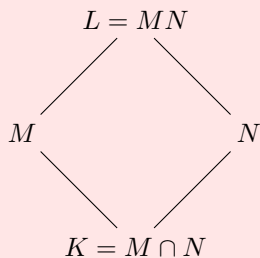


ここで, $\langle (1\ 2) \rangle, \langle (2\ 3) \rangle, \langle (1\ 3) \rangle \leq \mathfrak{S}_3$ は共軛部分群, $\langle (1\ 2\ 3) \rangle \trianglelefteq \mathfrak{S}_3$ であるから, $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}), \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega), \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega^2)$ は共軛体, $\mathbb{Q}(\omega)/\mathbb{Q}$ は Galois 拡大である.

7.3 Galois の推進定理

Thm 7.3 (Galois の推進定理)

L/K を体拡大とし, M, N をその中間体で $L = MN, K = M \cap N$ なるものとする.



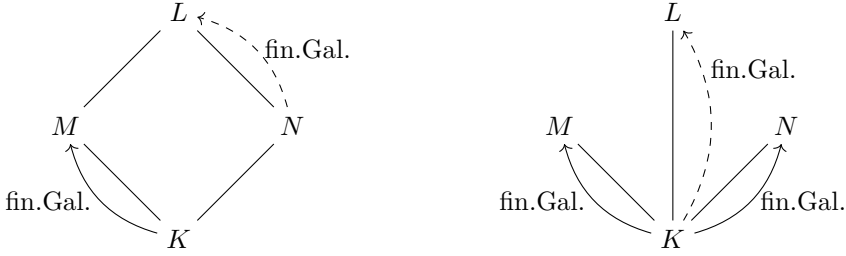
- (1) M/K が有限次 Galois 拡大のとき, ${}^{\dagger 20} L/N$ も有限次 Galois 拡大で,

$$\text{Gal}(L/N) \cong \text{Gal}(M/K)$$

- (2) $M/K, N/K$ が有限次 Galois 拡大のとき, L/K も有限次 Galois 拡大で,

$$\text{Gal}(L/N) \cong \text{Gal}(M/K) \times \text{Gal}(N/K)$$

^{†20} N/K には代数拡大を仮定しないことに注意されたい.



Proof. (1) M/K は有限次分離拡大なので, $\exists \alpha \in M, M = K(\alpha)$ である. $K \subset N$ より,

$$L = MN = K(\alpha)N = N(\alpha)$$

$f(T)$ を α の K 上最小多項式, $g(T)$ を α の N 上最小多項式とする. このとき, $g(T) \mid f(T)$ で $f(T)$ は分離多項式であるから $g(T)$ も分離多項式. よって L/N も有限次分離拡大.

また M は $f(T)$ の根を全て含むので, $g(T)$ の根も全て含む. よって L/N は正規拡大であり, 有限次 Galois 拡大である.

ここで群準同型 φ, ψ を,

$$\begin{aligned} \varphi : \text{Gal}(L/N) &\rightarrow \text{Gal}(M/K), \quad \varphi(\sigma) = \sigma|_M \\ \psi : \text{Gal}(M/K) &\rightarrow \text{Gal}(L/N), \quad \psi(\tau)(x) = \begin{cases} \tau(x) & \text{if } x \in M \\ x & \text{if } x \in N \end{cases} \end{aligned}$$

と定める. これらは well-defined である.

(φ の well-definedness) $\sigma \in \text{Gal}(L/N)$ とする. $\sigma(\alpha)$ は $g(T)$ の根なので $f(T)$ の根. よって $\sigma(\alpha) \in M$ なので $\sigma(M) \subset M$ で, $\sigma|_M \in \text{Gal}(M/K)$.

(ψ の well-definedness) $\tau \in \text{Gal}(M/K), x \in M \cap N = K$ とすると, τ は K 上同型なので $\tau(x) = x$.

このとき, $\varphi^{-1} = \psi$ である.

(\cdot) $\sigma \in \text{Gal}(L/N), x \in L$ に対し,

$$(\psi \circ \varphi)(\sigma)(x) = \begin{cases} \sigma|_M(x) & \text{if } x \in M \\ x & \text{if } x \in N \end{cases} = \begin{cases} \sigma(x) & \text{if } x \in M \\ x & \text{if } x \in N \end{cases} = \sigma(x)$$

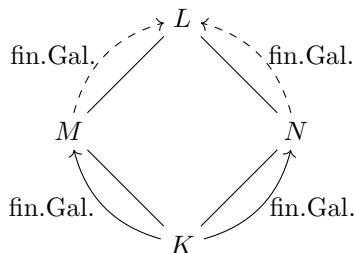
より, $\psi \circ \varphi = \text{id}$. 一方, $\tau \in \text{Gal}(M/K)$ に対し,

$$(\varphi \circ \psi)(\tau) = \tau|_M = \tau$$

より, $\varphi \circ \psi = \text{id}$.

以上より, $\text{Gal}(L/N) \cong \text{Gal}(M/K)$ を得る.

- (2) 仮定と (1) から, $L/N, N/K$ は有限次 Galois 拡大なので L/K も有限次 Galois 拡大である.



群準同型 λ を,

$$\lambda : \text{Gal}(L/K) \rightarrow \text{Gal}(M/K) \times \text{Gal}(N/K), \sigma \mapsto (\sigma|_M, \sigma|_N)$$

と定めると, これは同型である.

(単射性) $\sigma \in \text{Gal}(L/K)$ に対し,

$$\begin{aligned} \sigma \in \text{Ker } \lambda &\Leftrightarrow (\sigma|_M, \sigma|_N) = \text{id} \\ &\Leftrightarrow \sigma|_M = \text{id}_M, \sigma|_N = \text{id}_N \\ &\Leftrightarrow \sigma = \text{id}_L \end{aligned}$$

よって λ は単射.

(全射性) \downarrow で (1) を用いて,

$$\begin{aligned} |\text{Gal}(L/K)| &= [L : K] = [L : M][M : K] \\ &= |\text{Gal}(L/M)| |\text{Gal}(M/K)| \stackrel{\downarrow}{=} |\text{Gal}(N/K)| |\text{Gal}(M/K)| \\ &= |\text{Gal}(M/K) \times \text{Gal}(N/K)| \end{aligned}$$

よって λ は全射.

■

Example 7.9. (1) $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, T) = \mathbb{Q}(\sqrt{2})\mathbb{Q}(T)$, $\mathbb{Q} = \mathbb{Q}(\sqrt{2}) \cap \mathbb{Q}(T)$ である. $\mathbb{Q}(\sqrt{2})/\mathbb{Q}$ は 2 次 Galois 拡大であるから,

$$\text{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt{2}, T)/\mathbb{Q}(T)) \cong \text{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt{2})/\mathbb{Q})$$

- (2) $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt[3]{2}, \omega) = \mathbb{Q}(\sqrt{2})\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)$, $\mathbb{Q}(\sqrt{2}) \cap \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega) = \mathbb{Q}$ であり, $\mathbb{Q}(\sqrt{2})/\mathbb{Q}$, $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)/\mathbb{Q}$ はそれぞれ 2 次, 3 次 Galois 拡大であるから,

$$\text{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt[3]{2}, \omega)/\mathbb{Q}) \cong \text{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt{2})/\mathbb{Q}) \times \text{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)/\mathbb{Q}) \cong \mathbb{Z}/(2) \times \mathfrak{S}_3$$

参考文献

- [1] 雪江明彦, 『代数学 2 環と体とガロア理論 [第 2 版]』, 日本評論社, 2010
- [2] 雪江明彦, 『整数論 1 初等整数論から p 進数へ』, 日本評論社, 2013